



增補
改訂
佛社家時記彙考
四



增補 俳諧歲時記草

江戸

曲亭主人纂補
藍亭青藍增補



冬

漢書律曆志太陰者北方北伏也陽氣伏於下於時為冬冬終也物終藏乃可

稱せん顓頊せんぎょく帝○魏相曰北方之神じん玄冥げんめい神

月令冬月其帝顓頊其神玄冥云顓頊黑精之君玄冥水官之臣少皞氏之子曰脩曰熙相代為應鍾切律月令廣義鍾者動也言水官物應陽而動下藏也

立冬

同上孝經緯云霜降後十五日斗指乾為立冬十月節冬終也萬物皆收

小雪

同上立冬後十五日斗指亥為小雪十月月中天地積陰溫則為雨寒

則為雪時言者寒味深而雪未大也

孟冬

廣韻孟勉也始也冬始故曰孟冬

折木

通俗志作折木誤矣當作折木禮記鄭玄注孟冬者日月會於折木之律

冬

この説異端に近し、出入雲ふ事ありと、
 一天下のうち何ぞ神ありといふ月ありと、何田東麻
 呂翁の説ふ神無月ハ雷無月ハ十月ハ純陰の月あれ
 ハ雷の声收りし故入りし六月と雷鳴月とい
 ふふ對よりこれ古人未發の論あり、雷と神とのこ
 りこそハ萬葉小神の如聞つる瀧とよめと、後撰集ふ
 ちとやふと神ふのわらぬ我中の雲のさうふあふと
 ゆくのぬと詠ると雷神と又伊勢物語小神といひ
 ちと、又云神とつるさうさふ云云此外證歌多し○昔
 藍云世諺問答云此月と神無月と申ハ伊弉册尊
 崩し月あり神云云貝原篤信公翁ハ此月ハ卦ハ
 おと坤と純陰事を用ひて一陽未復陽無の月ハ
 神ハ陽の靈陽なきことと神ふといふ云云とつと
 とも荷田大人の説至當といへ、此月諸神出雲國
 ハ集りし故小神無月といふ説ハ甚じき云云談と
 ども能書ハ趣のさうさふさういへて句作をさし
 五元集 高砂や祿宜の
 湯治の神無月其角

十月 黃鍾

律月令 仲冬月 律中 黃鍾高詭
 注云 鍾象也 陽氣聚于黃泉

大 雪

節月令 廣義孝經緯云 小雪後十
 五日斗指壬為大雪十一月節

仲 冬

月令 仲冬 月令

周 正

廣義

復 月

五月一陽生
 至十一月一

暢 月

禮記注 暢克也言
 所以不可殺也者

言積陰為雪至
 此栗烈而大矣
 通鑑云 武王既勝殷乃改
 正朔以建子月為正月
 陽生是謂一陽未復
 故以此月稱復月乎
 以此月万物皆克實於內故也 宋氏謂陽久屈
 而後伸故曰暢月也 淮南子 命曰暢月 注云以
 民人無事間
 暢故曰暢月
 聖見月
 藏王 くらつる空のさう
 小聖見月けこと冬の

辛 月

淮南子 仲冬之
 月命曰辛月
 天正月

神 樂 月

藏王 くらつる空のさう
 の宮居の神樂月

月建子周正月是
 曆家曰天正月
 冬

たのこも葉の音のこもき定家○露水云陽文
 中つらと神の岩戸より出らふ比して神樂と奏ま
 る月とつらと神の岩戸より出らふ比して神樂と奏ま
 三糸の御神樂本と行つる由多し名づけしあり
 霜相降月 霜より月の空よりや雪けとて是なり
 蔵王風

十二月大呂

律高秀注呂侶也萬物萌動于
 下未能達見所以配黃鐘也

陽宣小寒

節月令廣義孝經緯云冬至
 後十五日斗指癸為小寒大

寒

中同上小寒後十五
 日斗指丑為大寒季冬
 之月云云

臘月

說文冬至後三戌為臘祭百神也漢以
 戌日為臘魏以辰日晉以丑日禮傳臘

者獵也因獵取獸以祭先祖祭邑獨所
 臘者歲終大祭也故小臘月といふ

涂月

月令斗建丑之
 辰一曰涂月

殷正

夏以十三月為正殷以
 十二月為正周以十一

月為正故有
 殷正之名

周年

文選舞鶴賦
 景周年云周年ハ年の周落

急景
 日景短急云

窮月

禮記季冬
 之月日窮

干次月窮十紀星廻干天數將幾終注云日月
 星辰運行至此皆速故處也次舍也紀猶會

霜蟾

蟾ハ月中ハ蟾蜍ありといふより月の事也
 霜夜の月の事也霜降る

あれ秋冬の月皆霜蟾といへし陳東義秋夜詠
 月詩ハ映霜蟾と見えあ統む冬の月ハ限りし

殊更十二月の異名の十ハ難し増山の
 井不出せり論墨大全の意不審也

弟月

此月

年中月の終まり故小俗ふこ子月といふ
 和の諺ふ末の子とこ子と称すれども

春待月

蔵王これてのこもる身ふもる光る
 と夫待月ののこもる身ふもる光る

梅初月

蔵王

冬

花ハまことつちむえとてほのろまて
梅もつ月のころろりあがり頭昭
三冬月
いそふつもの雪のはらとて定家

十月 亥の子 けの部 亥猪の 射場 いむ
条下ふ注も

始 公事根源 光此月の三日ふ左右衛門弓場の棚と
はくふとの日ハ天子ゆむ殿ふ出さむひて弓と
御覽むる也公卿以下束帯あてこれといふ天子御射
席をまうせて弓矢と御座の左右のつきまふもあつて
と群臣といひまうて弓と射あふあり誠ハ文武二ツ
の道ハ一とまうてあつて故ハ武をあらせせてあつて

○江次第ふ十月五日射場始注藏人
式七日ハ五日ハ残菊の宴ふまて

兼三冬物

凍 字景孟冬 くせに 江湖の産魚ハ大き
始て凍る **鮓** るもの漸一寸五分寸ハ満るもの

多し頭口大きく尾細しこれを煮食ふ小腥く佳品
らと冬月和尔堅田江の漁人多くこれと取賤民賞

並みくも 後養集 時雨も 方集 伊沙那
ちらありのゆへへら 今いふく

あて射 三枝祭の **十月** 卒川祭 上酉日夏の

三枝祭の **十月** 忌日御飯 朔日 公事根源六

鱒の頭枕 せの部 節分 いぬる年 詩經 亦莫

十月 爐開 あひらき 炉を置寒を敷くこれを炉
開きといふ又茶人も炉開き会

進 爐炭 煖爐會 事文類聚 十月の朔有司
煖爐炭と進民間置酒して

煖炉會 呂原明歲時雜記 京人十月朔酒と次
て乃骨肉と中不灸了團居して飲啗ふこれを煖炉

兼三冬物 爐 和漢三才圖會 地爐和
名炭櫃の畧茶湯小

十二月 臘日 風俗通 礼傳
云夏小嘉平と

冬 いろは

いひ、泉いづみ清祀せいしといふ、周しゅう大端だいたんといひ、漢改かんかいて臘ろうといふ、臘ろうは、
獵りやうより獸けつを臘ろうし、取とて先祖せんぞを祭まつる、説文冬至とうじの後
三戌臘さんしゅうろう、百神ひやくしんと祭まつる、徐錯じよさく曰いふ、臘ろうハ、
臘ろうハ、合あはし、諸神しよしんと合あはせ祭まつる、臘ハ、
臘ろうハ、合あはし、諸神しよしんと合あはせ祭まつる、
臘ろうハ、合あはし、諸神しよしんと合あはせ祭まつる、

臘梅ろうばい 時珍じしん曰いふ、臘梅ろうばい一名黃梅花わうばいめい、此者こゝ梅ばいの類るい、
蜜蠟みつろうハ似にたり、故ゆゑ此名こゝと得え、大和本草臘梅ろうばい、近ちか年ねん中華ちゅうか
よりわき、臘月ろうげつハ小黃花せうわうかと開ひらく、蘭らんの香かほハ似にたり、葉はハ
榜ぼうの葉はハ似にたり、小せう黄わう花かと開ひらく、木きの高たかハ二三尺にさんせふ四五尺ごしふ、
過すぎ、大坂おほさかハ唐梅たうばいといふ、梅ばいの類るいハわらむ、臘月ろうげつハ
の義ぎハ、わらむ、其花そのはな黃わう蠟ろう色しき、鹿膏の赤あかく出で、
小似せうにたり、故ゆゑ臘梅ろうばいと名なづく、

は 十月じゅうがつ拜墳ばいふん 一日いちにち 夢筆録むへふろく 十月じゅうがつの朔しやく、
の士賤しじけん皆みな城じやうと出でて墳ふんを
朝あさも、寒食かんじきの節ふしの如ごとし、
芭蕉ばしやう忌い、士し日にち俳諧ばいげい正嵐せいらん
體たいの開祖かいそ

亦またの庵号あんごうあり、干論かんろん為な辨抄べんせう、
とつる、伊賀いげハ四姓ししやうあり、桃池とうち黨たうていの中なかの松尾まつお氏し
あり、とむ、俳諧ばいげいの名なハ宗房そうぼうといひ、落髮らくはつの後のちハ桃
姓しやうのいとき、桃青とうせいともいふ、梅子ばいし熟じやくせいの意い
あり、とむ、伊賀いげハ名家めいけ名なをとけざるのいひあり、十九じゅうの
年ねんハ官くわんと名なをきて、洛陽らくやうハ李吟りぎんを師しとす、武陵ふりやうハ其
角かく嵐雪らんせつと門人もんじんとせり、深川ふかがわの芭蕉ばしやう菴あんハ隱遁いんとんあり、
三十六さんじゅうろくのといふあり、風俗文選、許六作者しやくろく列傳れつでん云い、芭蕉ばしやう
翁おんハ伊賀いげの人ひと、武名ぶなハ松尾まつお甚た七郎しちらう、骨ほねて世よハ功こうと遺いえ
とす、武ぶの小石川おのいしがわの水道すいどうを修しゆして四年よんねんハ成なりる、速すみハ功こうと

捨すてて深川ふかがわ芭蕉ばしやう菴あんハ入いる、年ねん三十七さんじゅうしち、
正傳せいでん、蘇堂家譜、藩竹二坊、芭蕉ばしやう翁おん桃青とうせいハ伊賀いげ國くに河拜かはい郡ぐん
松植しょうち村むらの人ひとあり、俗称じやくしやうハ松尾まつお半七はんしち、後のちハ改かへて松尾まつお忠告ちうか門かど
宗房そうぼうと呼よぶ、正保元せいほうげん甲申かうしんの年ねんハ生なれり、跡平あとへい兵衛べいゑい宗清そうせい
苗裔めうゑいあり、宗房そうぼうと名なづく、父ちちの名なハ儀ぎを衛門ゑもん、母はは
ハ豫州よしゅう宇和島うわじまの産うみ、桃池とうち氏しの娘むすめあり、支考しこうハ翁おんの碑い
名なハ其先そのせんハ桃池とうちの黨たうていとす、今いまの氏しハ松尾まつおなり、
乃すなはち母ははの氏しと聞きあり、しもの、跡平あとへい兵衛べいゑい宗清そうせいハ屋

冬ふゆ は

苗裔めうゑいあり、宗房そうぼうと名なづく、父ちちの名なハ儀ぎを衛門ゑもん、母はは
ハ豫州よしゅう宇和島うわじまの産うみ、桃池とうち氏しの娘むすめあり、支考しこうハ翁おんの碑い
名なハ其先そのせんハ桃池とうちの黨たうていとす、今いまの氏しハ松尾まつおなり、
乃すなはち母ははの氏しと聞きあり、しもの、跡平あとへい兵衛べいゑい宗清そうせいハ屋

乃すなはち母ははの氏しと聞きあり、しもの、跡平あとへい兵衛べいゑい宗清そうせいハ屋

乃すなはち母ははの氏しと聞きあり、しもの、跡平あとへい兵衛べいゑい宗清そうせいハ屋

敷跡今ふ存り、庭ふ大なる。石の手水鉢あり、人々もこ
 まど名物とす。其類今同郷に姓をとり、柘植氏、松尾氏
 福地氏、水尾氏、儀礼工門、嫡子典左工門、上野赤坂町に
 手跡師範と以て家業とす。次男半左工門、藤堂主殿
 長基の臣とす。三男忠右工門、色蕉、寛文壬寅年藤
 堂新七郎良精の臣とす。夫より嫡子主計良忠、能名
 へ隨身とす。伊賀上野桐雨筆記、桐雨、翁の門人、蟬吟子
 六浴の季吟俳諧と學び、申さる。故ふ翁もとり、其
 門ふ入て、いぬとさる。此世の中より、西の年と発句あ
 り、十四歳の時、用曆三ふるふ蟬吟子ハ不幸に
 て、寛文六年の四月世と早うし、故ふ翁ハ君臣の
 内風雅の録いとく、年なる。數のあまの遺骨と負く
 高野山ふ登り、報恩院ふ納り、六月帰國とす。この後、
 うに通世の志ありて、二君ふ仕へる。はと告て、ありふ
 暇とむい申さる。とて、ありふ。其秋、
 らん同僚、孫太夫といふ者の門ふ、短冊を粘け、ありふ。雲と
 ころ、夜ふや雁のいささ、ありふ。一句と残し、國と去る。
歴代滑稽傳 詩六 芭蕉翁桃青ハ伊賀の産江戸居

て俳諧よ鳴る。桃青二十奇仙といふ俳書と著。二十奇仙
 吟の内、ありふ。波とつて、腸永る夜ハ涙子とありふ。鯨の
 其まらり、ありふ。一オ二の弦いと、ありふ。牛房と刻
 む。前後名を出し、ありふ。撰集ハ二十奇仙一部、談林の
 時俳書ハ長し日々向上ふす。あげ、終ふ談林と見破り、
 はじめて正風体と見届、躬恒買之の本情と探始て、ありふ。
 の辺の木槿ハ馬ふくを、ありふ。と申さる。天下、ありふ。俳
 諧中興の開祖、正風の翁と称し、侍る。天下の門入、ありふ。數千
 人のうち、ありふ。正風の体と得るもの少し。初懐紙の項
 杉風嵐蘭、其角、嵐雪、曾良、水江戸ふ在て、ありふ。其
 ころ故郷伊賀ふ立帰る。道の紀と草枕とも野ざら
 の紀行ともいふ。大津の千那、尚白、青垂、三人師といふ。此
 幸奇の松ハ花より、ありふ。此とこの事、ありふ。名古屋より
 野水、荷さ、ありふ。この杜国、冬の日、俳諧と撰し。次の春
 春の日、ありふ。と、ありふ。野ハ俳諧と、ありふ。風体、冬の日、春の日
 ハ初懐紙ふらりし。曠野ハ俳諧の、ありふ。と、ありふ。し、ありふ。
 大垣の如行、荊口ホの門入、ありふ。師とし頼む。野ざらしの
 紀行の時あり、其後、ありふ。真の細道の時、大垣より伊勢、ありふ。迂官

冬は

木節あらし知るものあり、願くハ木節を急ふよびて
見せんとらん去来と一同ふよびよを談まきこと中右ふ
よびよも如く消息をおろさるべしとあり、夫より兩人消
息をもちぬ、京大津つをつらしむ、然るふ之道、
亭ハ狭くして外ハ間所も多し、多人敷入ること保
養介抱もあらずとて、其所此軒と立廻り、我知る
人のく、御堂前南久太郎町、花屋仁左門といふ者
の裏座敷とかり受り、間所も敷ありて亭主、物
敷寄ふ奇麗く、諸事ハ勝手よろし、其夜直ふ御介
抱申て花屋ふうつらひひ、此時十月三日、四日重霜
畦止、舍羅、何中ハ師の不例とあらざ、之道亭主至じ
病ま病ま病ま事と聞えりて花屋ふまぬ、病氣不ま張紙
つこと尋問の人よりとも、さうりみ坐席入通るはし、
と出き、且仁左門が断ると云、三日廿七行、昼夜ハ天
くとも、夜半過、去来きこも、二日朝の状、三日の朝とく、
其座より直ふおち、伏見ふ出しハ己の時あり、其
舟ふち衆ハ軒屋ふ著しハ亥の時ありしとて、直ふ脚
病床ふ恭まし、師も嬉しと胸ふせまう、まじハ

わのと宜まし、諸國ふらまをし人々ハ我と親の
如く思ひあふ、我老れに優まきことあられ、子の如
く思ふ事もあふ、殊更汝ハ骨肉とつけし思ひあふ、
三日見さる、十日のおひせう、さうらふ此度か、速き
境より難治の憂ふ懼り、再會あり、思ひ居りし
ふ逢見、さうの嬉しさをて、袂とちりり、去来と
さうり落るふも、ぬぐひて云、僕世務ふい、まじハ
させる實意も尽さるふ、かゝる御懇意の御意とあり
ふ事、生と隔つとも忘却仕らぬ、教行の淡ふじせふ、
何様賣薬の効驗心も、さうとて、去来又消息とて、
ためて飛脚便り、木節ふつらむ、**支考手記**云、同二日
の夜子の時、いづきて木節来る、二日出の兩人の消息
その夜着せしゆ、大津と丑の時、さう、一番舟ふ乗り
し、短日故運着、諸子ふさく、ふして直ふ御容
體とさうい、脚脈と診き、主方逆挽湯と調合と、四日
朝、木節申さる、ふより、朝鮮人參半兩、道修町伏見
屋より取、同、包香十五袋と、天氣より、之道、こ
より世話と、洗濯老女と傭ひ、師の脚衣裳、その外連

冬は

中の衣裳と云々、園女子の御菓子、水仙と贈らる。

支考、惟然介抱、次郎兵衛とて、手届く、之、道取計らひ

とて、舎羅香舟と云々の来、又按摩と云々の来、今日

三十余度、及ぶ、度毎、裏急、後重、次郎兵衛手記云

五日朝、犬草、乙州、正秀、来、天氣曇、寒、冷、甚、し、時、候

の故、名、師、時、惡、寒、の、氣、あり、次、郎、兵、衛、天、滿、不、諸、く

昼、ま、き、帯、る、今、日、師、食、く、ま、い、ひ、索、麵、二、箸、夜、中、迄、不

五十度、及ぶ、六日、天氣、陰、暗、き、ま、ま、い、ひ、朝、の、食、乳、面、三

箸、前、後、よ、り、今、が、ら、寝、入、ら、る、ま、ま、い、ひ、く、睡、眠、し、給、は、

目、覚、り、去、来、と、う、ろ、く、召、し、て、先、の、頃、野、明、方、不、残、し

置、し、大、井、川、の、吟、行、せ、し、句、大、堰、川、波、ふ、塵、ふ、夏、の、月

此、句、の、ま、り、景、色、過、さ、る、と、い、ふ、夏、景、色、の、い、ろ、く、と、い、ふ、思、ひ

居、ろ、く、し、が、清、滝、ふ、て、清、滝、は、波、ふ、ろ、く、と、い、ふ、枯、松、葉、と、作、り

事、柄、の、変、り、ろ、く、と、同、案、ま、ろ、く、と、人、い、ろ、く、と、い、ふ、あ、れ、と

大、井、川、の、句、ハ、捨、て、ろ、く、と、汝、不、申、し、ろ、く、と、い、ふ、頃、日

園、女、不、招、れ、て、ろ、く、と、の、目、み、と、い、ふ、見、る、塵、も、ろ、く、

と、吟、じ、ろ、く、是、ま、ろ、く、同、案、不、似、て、句、の、道、を、ら、同、し、夫、故

前、の、二、句、と、一、句、不、捨、て、白、菊、の、句、と、残、し、置、ん、と、思、ひ、

汝、の、意、い、ろ、く、去、来、涙、と、ろ、く、名、匠、の、か、く、名、と、惜、し、道

と、重、し、給、ろ、く、有、ろ、く、と、い、ふ、ろ、く、一、章、み、と、い、ふ、千、辛、方

苦、し、ろ、く、御、病、惱、の、ろ、く、の、脚、骨、折、凡、雅、の、深、情、と、い、ふ、尊、と

と、是、眼、あ、ろ、く、の、何、者、ろ、く、此、句、を、同、案、と、ろ、く、と、い、ふ、恐、ろ、く、ろ、

此、句、を、同、案、同、意、と、ろ、く、申、も、ろ、く、の、無、眼、人、と、申、者、ろ、く、

そ、の、故、ハ、此、句、々、景、情、不、備、と、て、句、意、と、見、る、時、ハ、三、句

と、ろ、く、不、別、ろ、く、我、ハ、句、の、意、と、目、見、て、句、の、水、と、見、る、青

苔、日、厚、自、無、塵、是、隱、者、の、高、儀、と、い、ふ、と、い、ふ、語、園、女

い、ま、と、い、ふ、と、い、ふ、して、陌、上、桑、の、調、の、ろ、く、と、い、ふ、ろ、く、と、い、ふ、意、と

妙、と、語、と、妙、と、ろ、く、世、人、此、句、を、ろ、く、と、い、ふ、れ、園、女、清、節、と、い、

ら、ろ、く、ん、波、ふ、塵、ろ、く、の、語、ハ、左、太、仲、が、必、非、蘇、興、行、山

水、有、清、音、と、い、ふ、絶、唱、も、ろ、く、と、い、ふ、と、い、ふ、園、女、二、夫、ふ、ろ、く、と、い、

と、い、ふ、貞、潔、と、大、井、川、清、滝、の、絶、景、と、二、句、の、間、相、と、い、ふ、の

つ、て、感、じ、て、も、餘、り、ろ、く、と、申、せ、ろ、く、と、い、ふ、師、の、機、嫌、と、い、ふ、と、い、

し、け、ろ、く、去、来、手、記、云、七、日、朝、ろ、く、と、い、ふ、不、相、應、の、暖、氣、と、い、ふ、と、い、

て、ろ、く、と、い、ふ、薬、方、逆、挽、湯、ふ、加、減、又、乳、麵、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

園、女、ろ、く、見、舞、と、い、ふ、と、い、ふ、菓子、亦、贈、り、来、る、鬼、貫、来、る、去、

来、應、對、し、て、還、る、園、女、何、中、溜、川、来、る、去、来、文、考、會、秋

冬は

終小葉とめさむ終日くゆる夜ふ入て暗る人言の
 静るるはむむ灯のりふ人々伽し居る乙刈正秀
 小去来小申しらる今度師り泉下の客とせらせ
 給ひ此後の爪雅いう成行をら入去来黙して居る
 しが我も其事心あかりし故二日の消息なきしやを
 斯のときもわたり人々も左思ひ多しやとあはし今
 宵閑静に只今の体ふせし御快復覚束ふし
 滅後の非諾とせし奉らんとせぶつふ枕上ふうかひよ
 つて機嫌とせららひ問申しらる翁次郎兵衛ふた
 けはこれ息つてもあはし日非諾の變化究つてもしつ
 まるも真草行の三もともあはし其三より千変万化
 せ我のまご其書とめくもせ汝此以後とも地を
 せらるそとあはれ地と心ハ社子美々老と思ひさし西
 上人の道とせらひ調ハ業平が高儀とせらしつらまて
 も我をせむりくわひゆめく他ふ化せらつともあ
 せらひとせもわれども息損口うまらんと喘ぎさひ
 るとせハ吞舟脚口もくわらわと又薬とまわらせせまら
 まらるんかのく華と扱て是と書と惟然手記云

八日天氣快晴御不食あり京の損士来り信徳より消息
 とめて御病体と問近江の角上より使来る人々勝手の
 間て今度の御所労平復と祈奉らんとせ任吉大明神
 小連中より人と立べと去来申しらるわらわくもあ
 べし之道次郎兵衛闖はらうて社務林采女方小祝詞
 とらる厚く神納の品々贈らる奉納峠こも鴨のこ
 ろや諸きわひ大草木がらしの空見あむと雀の声
 去来起る声わらまらき湯波うた支考「足らるふ
 竹のこややとせし惟然此外連中の大勢の集會ふ
 らるは悦い真しと師とせらあらり木節去来小申
 々るハ今朝御脉をうらひ見申もふ次第小氣力もあ
 らるふとせとせ脈体もらし最初小食滞とせららし
 泄浮ふとも根元脾胃いせの虚とせ大虚の痢疾なり故ふ
 逆挽湯主方とせ尚又加減して心を尽まらつてと薬
 力とせ願くハ治法と他醫ふらんと思ふ去来師の
 申師の日本節の申条わらとせむらる仙方ありく
 虎口竜鱗と醫とせと天業つら甘ん吾うく悟道した
 せハ我呼吸のうらる間ハどうも木節が神方と服

冬は

せん他ふもとむる心ありとのこまひも又支考、乙州亦去
 来ふ何うとやきまれば去来心得て病床の機嫌とらふ
 て申して云、古来より鴻名の宗匠はらく大期ふ辞せあり、
 さむりのの名匠の辞せはあつうしやとせふつゝのあり、
 べしおひと一句を残りしもの、諸門人の望も是ぬべし、師曰
 昨日の発句ハタハの辞せくハ発句ハ明日の辞世吾生涯
 のひ捨し句々一句とて辞せあらざるはあつゝ、我辞世
 いうやとふ人あつゝ、此輩どうのひ捨せし句、どうのひ
 辞せありと申給ひし、諸法從來常示寂滅相、
 ハ是釈尊の辞せありて一代の佛教此二句よりハ後
 古池や蛙飛るじ水の音此句ハ我一凡と與せしもの、
 めて辞せ、其後百千の句と吐ふ此意ふらざるはあつゝ、
 らを以て句々辞せあらざるはあつゝと申、次郎兵衛が側
 より口を潤まふとて、い息のうらむ、支考手記
 八日夜ふ入て、嵯峨の野明為有より柳を贈り来ふ消
 息と、今日まで伊賀より音信あり、去来乙州申談し
 ことと飛脚を立せし、師ふ申され、師の曰我隱遁
 の身として、愚弱なる身の、教百里の飛杖あり、立親族
 よりと、あつゝとあつゝのあつゝ、我過あり、今大
 病と申ゆくりあつゝ、一類中のまき、殊ふ主公の聞しめし
 もおととあり、あつゝ此度大切不及と、沙汰有まらんと
 宣ひたり、師の慮あつゝと、たのく、感心を、度數六十度ふ
 及ふ、惟然手記云九日諸子の取ららむとて、衣衣衣
 又夜具事、の垢つゝと、不浄あるを脱がし、よき衣のせ
 へまわらし、師曰遠地波濤のほとりふ草を敷塊と枕と
 して、然と取つゝ身のぐる美々しき、褥の上ふ、と
 未来よとの友とちあつゝ、鬼録ふ上とて
 受生の本望あり、昨夜目のあつゝ、不斗安し入、
 吞舟ふとせたり、詠じ、旅おやとく、夢を枯
 野とけ廻る、枯野とあつゝ、夢とらふと、侍、つれ
 あつゝ、辞せあらざる、辞せあらざる、おも
 らぬ、病中の吟あり、あつゝ、生死の大事と前置
 あつゝ、いふ生涯、一風流と、いふ、
 枕のことも、いふ、去来つゝ、左あつゝ、日々朝雲暮雨
 の間も置き、山水野鳥の声も捨、あつゝ、心身凡雅あら
 ざらふ、河魚の患つゝ、いふ、

冬、は

あつらひ謝しむひて三人の衆とちりて見れば

州正秀と左右より支考惟然ふ筆とつせおき跡のこと

こまめくと遺言しむ病苦とてしもとておのひん

奇異の思ひをあらはし伊賀の遺書ハ手づつら認め

るい京江戸美濃尾張りもつらやう遺言しむこと

門人筆記も次第ふしむるやう痰喘とて損多しなまは次

郎兵衛湯あて口をうらわしまあせたる良ありく

去来ふひひるし先ころ實永阿闍梨より路通事

仰ありその後汝が文章乙州ホ贈りし消息露霜と

捨置きて併ひしころありて雲井のよふふは侍

りもつ数年の薪水の受あつて置む我多き跡

あいのこふ見捨とぬら風交しめくこめとたのと侍る諸

國おも傳へぬらとていひ終つて多ひて餘言は合掌

正しく観音経聞えてふそり息の如くいも遠く

申の中刻とて埋火の向てまうりこひが如く次郎兵衛

が抱きまわらせふよりくらく死顔らうりく眠

れも期として物うちけたり時不元禄七甲戌年十月

十二日御歳五十一也即刻不浄ときり白木の長櫃

収めまわらせその夜直不川舟にて伏見まで御供し奉る

其人々ふ其角去来本草乙州正秀木節惟然支考之

道吞舟次郎兵衛以上十一人花屋仁右門が京へ荷物を

送る体と長櫃の前後と取まき念仏誦経むひく供

養し奉る八幡と過るころ夜もあつて明もさするふ

僧李由の下とつる舟行あひも色はばとて棄つり

相とあふれき物とりておとあ京橋ふ着夫より

狼谷通りふかりつとふいそく程不十三日巳の時きふ

大津乙州を宅ふ入奉り御沐浴之道吞舟次郎兵衛

く脚髻の伸させらる月代む文章法師あつて御

法衣淨衣ホ智月と乙州が妻健奉る淨衣白衣とて召

さすまわらせとておとあ京橋ふ着夫より

装とておとあ京橋ふ着夫より

らひて淨衣も茶色の服ふせらるるて葬式八十四

ありて終焉記云湖南の義仲寺本館と移して近里遠

境の名を傳ふ人ハゆらゆらふもせまりて九三百余人

あつて墓ハ木曾殿ふよりておのづから古ひる柳ゆ

われは終焉のちりあつておのづから野面の魚鱗

塔とまはらびわら垣とまはら冬枯の芭蕉と種て其名
 の記念といふせりなり實ふと所いふの山也芭蕉の筆
 由らうまはら鳥のさ波も受ふもせで潜行舟の観念
 のこよりあらまはら熱路の鹿田家の窟つて湖上の月ふ
 映して此廟前の風景とまはら遺骨も永く此地の清の
 らんさうはさこのさつひもさうふもさうも遠く凡のさうり
 小我翁とまはらん人公受ふ此記とめて回向の便りといふ
 士以上考證ともあらう書いふより抄出と小文庫
 芭蕉忌と申すあり
初雪 **初雪消** 初雪は積り
 たり三四忌 史邦
 故ふ消るといひても冬あり○
初雪見赤 公克
 初雪や水仙の葉のたむは遠き置
 むう初雪のふる日群臣赤内し侍るを初雪の目撃
 と申へ桓武天皇延暦十一年十月よりをいふも初
 雪ふるさうも深雪の時必諸陳
 見参ともさう此更絶て久し
初霜 霜の注ハ
 一の部
 冬菊の
 異名也

兼三冬物腹立
 藏玉とまはらる庭ふさぐも初
 見草花さきわたり霜を置え
初時雨 同 **初氷** 同 **初見草**
 冬菊の
 異名也
兼三冬物腹立
 真淵翁云くはら
 とくふ同じ万葉小八雪

翮の部河
 豚の糸注
いざり雪
 のこありと霜
 とまはらしよひ
賣炭翁 炭賣といふあり韓琦
 廣陵大雪詩器實江
雙水透葦賣炭翁 鷗、負雀和名とくさう俗云とい
 野翁泥没輻 鷗 たう和名ふのり鷹ふ似て小まこ
 物く鷹の雛ふはわらも別種あり遍身鷹の如く黒き
 斑あり腹ふ黄黒の斑あり埋あり赤白斑ふ交る者わ
 り又胸腹灰赤色小黒赤の斑を
 交へ背純ら黒く光を含む者あり
集
鷗 音 長 和名ハ 張九齡曰鷗と集といふ雄と
 鷗 音 長 夜布佐 鷗 胎と較ぶる
 懐胎の者小遇ふとまはら轍ち放て殺さず鷗ハ鳴鳴及
 い小鳥と較ぶて足と煖う且まこれと較て此鳥東ふ
 行ときハ是日東ふ往て物と撃らる西南北とこ然り
 此天性の義ハ此ら鷹ふ似て蒼黒胸腹灰白ふ

冬
 は

時珍曰胡蘿蔔元の時始て胡地より
十月新

来る気味蘿蔔不似より故ふ名づく
嘗祭 中ノ夕 **公事根源** 今年ハ初詣と神奉ら

ハ五年毎のものと新嘗会といふト食の人々
掃衣日陰と著き用昭天皇二年四月より始む **庭燎** の

部神樂の **錦の帽子** 部の鷹の葉 **新玉津**
奈不注す

島火焼 十三日俊成卿御着之五奈の南島丸の西玉
津島町不あり **紀事** 昨今冷泉家

多く恭詣と或ハ法衆の和音あり九この門前一町と
とこそく此社の氏子あり今日市人神前の御酒を

冷泉家不献る時 **雞乳** 部の鵲始築
ハ酒食と賜さる

十月法勝寺大乘會 廿日より ○當寺ハ
廿八日まで 白河法皇

の皇居よりその後天台宗の住持聖道衣あり後
醍醐帝の勅ふより律衣とある今寺絶て岡崎

村の數中小諸堂の跡残る九重の塔の跡村の南ふ所
ア塔壇と号す糸櫻の名所あり風雅集淨妙寺関白

らよぐで過ぬと名ゆへ糸さうらう心あり春のよる糸
一説不當寺ハ南禅寺の西北新黒谷の南ありふの地

ハ白川の大正忠仁公の別業あり寺ハ白川院の御願
あり當寺の九重の塔浪速の浦ありつりといふ

蕪三又物楯 可くりせと材不伐て取ると木根
と掘出しとるものあり關東まで

根骨といふ山家玄冬のころ炉不昼夜こまこと焼く
寒と凌ぐものあり **糸切菌** 不楯ハ昼夜すくものあり

らむ灰とむわひ埋火といふ **干菜鈎** 干菜こりのあり
夜明る迄寒と防ぐ用と

抹て簷下ふりけ陰ふ **十月報因講** 御仙事
乾も喚て懸菜と号

廿二日より廿八日まで ○親鸞上人の忌日あり上人ハ
内丸の後胤藤原の有範の男伯父範綱養ひて子

とも守ハ善信坊名ハ緯空又範寛と更り初め蕪鎮
と師とも後源空の才子とある弘長二年十月廿八日

冬 ぼへと

寂と年九十一浄土真宗の開祖より東西本願寺に
廿二日より廿八日まで報恩講と修ま京江カ在家宗門の
徒衆諸群集を或ハ御霜月と称そ又御講のハ昨
今時として天気快晴多俗ふまを御講出らへ

十二月星佛賣

十一日 紀事 此月十三日大佛師
未年の属星の形を彫く

禁裡小献む民間も亦この事と多故入人家各星
佛を買帰依の僧と請まこと祭故市中星
と賣者あり所謂日曜月曜水曜



水曜火曜曜曜計都の像あり
冬瓜 時珍曰冬瓜其冬熟を以てまあり貞亨
或ハうらりと訓ありて中古ハ総て秋季とませり

西瓜と秋とませり加減より
冬瓜と冬と定むとあり
東福寺開山忌 聖

兼三冬物鳥叫鳥立と暮

たの部鷹 海鼠 十一月冬至
朔且冬至 月今廣義 六雪の後十五日斗子小指と

一陽の嘉節 冬至と十一月の中陰極て陽始て至る
日南不至漸く長く至る 玉燭宝典十二月子不建
す周の正月冬至日南不極て景極て長し陰陽日月
万物の始の律黄鍾不當ふ其管最も長し故履長の
賀あり○朔且冬至李吟云十一月朔日冬至ふあことあり
あり廿年一度まりとあてめて瑞祥ありとありて
其日ハ天子南殿より出御ありて旬と行せと多ハ公卿
賀表を奉るとあり○一陽の嘉節李吟云十月八無
陽の月冬至一陽來復せり孝經の説ふ冬至より
三義あり一ハ陰極るの至り二ハ陽氣をじて
至る三ハ日南不行くの至る故ふ冬至といふ 童女

御覽 豊明節會

江次第 新嘗会裏書云毎年十一月中の辰の日行之
豊の明の節会是天子新穀と嘗む故ふ新嘗会

とつ云云 **公事根源** 今年の箱と神奉らせりて
 今日君もきこし、臣もたまふ故、節会行は
 新嘗の祭りて、上卿宰相、辨小忌衣と著る、余人
 ハ諸司の小忌と束帯のし、著る、（注）青
 摺を用ふ、上卿宰相辨の上首と勤、南殿の箱、元
 子とまうけ、内辨已下座あつく、白き酒黒き酒の盃と
 とき、大寄の別當りより、舞姫のぐり、五度袖とひ
 へして、くち入、事、堪、上達部五節所とあひて
 催馬衆を、くち入、節会の儀、常のことし、下畧○小忌衣
 奇服、小忌の音摺、小忌の袖、山藍の袖、或記云、小忌の文竹
 桐夏、堂く、冬ハ堂く、舞人と奉る、時拜領すとて、え
 ころ、年少の人ハ私ふことを調、着用をくらふ、大嘗会豊
 の明の節会、用、件の節会、（注）の袍と着用と、其時
 關袴の如し、但身一幅、（注）の寸法と用ふ、又白き袍と
 粉張り、と藍とをとり、後、堂く、裏あり、只一重、又小草
 柳、水草、蕨、蝶、小鳥、ホ、山藍の葉、く、摺、又諸司小忌と
 とい、わ、建曆の度、麻布、鹿、思のもの、**和訓栞** 小忌ハいと
 累、と、人、思、小、對、と、此、大、小、ハ、鹿、細、と、い、ふ、○日、陰、蔓、日、陰、

の糸 **和訓栞** 延喜式、日陰の蔓とて、古事記
 天の日影といひ、神代卷、以羅羅為手綱とて、松羅
 一名女羅是、ことども別種あり、今狐のとうせと
 い、人物是、新拾遺、玉ひうけともあり、大嘗会、用ひ
 させらる、式、み、く、出、今、白、糸、青、糸、を
 組、冠の左右、無、せ、其、表、物、の、り、日
 うけの組ひうけの糸とも、て、盤、戸、神、の、も
 せ、ひ、時、日、影、出、（注）を
 き、（注）○心葉 **和訓栞** 大嘗会
 小冠の上、懸る、の、祭、主、ハ、賢、木、の、枝、と、せ、り、
 神代の巻、ふ、その、旨、と、て、り、桃、花、葉、葉、心、葉、ハ、金
 銅の梅花とて、之、萬、葉、集、大、嘗、会、の、も、と、り、之
 たり、今、主、上、ハ、櫻、の、栴、頭、を、造、大、臣、ハ、藤、大、
 中、綱、言、ハ、山、吹、叢、談、ハ、梅、し、も、滅、金、用、
 東三

條の御神樂 かの部神樂
の糸云 **採物歌** かの部神
樂哥の糸

道祖神祭 十六日、持、西、天王、寺、領、天王、寺、村、小
 出、あり、祭、る、所、藤、田、彦、命、あり、

冬、と

この日一村の童めりまり、往來の人ふ錢と乞ひて祭礼の料をも錢と乞ひて、戯れ小繩と以て往來と遮り留む、あつてこのことなるもの、商買といふも今日此處と通らぬ、但壞の魚荷飛脚ハ故ありとく道路をづらひ、**酉の市** 酉の日伊豆國賀茂郡三島の馭あり、**鶏の**

町詣 酉の日鶏大明神の社ハ武州葛飾郡花又村あり、**江** 江戸近在より諸人群集して甚ど賑り、是當社神事の遺意久土産小芋うらと賣之、赤詣の人必これと買ひて家小帰ふ、又此日浅草寺の裏手鶏大明神も此市ありて群集、**冬至梅** 和漢三才番会單葉の冬至梅中花ありて紅の冬月

ひらへ八重ありて、**十二月立土牛童子像** 花浅紅の者あり、**公事根源** 大寒の日夜半小陰陽師土牛童子の像と門口より昔黄赤白黒の土牛と門々小春夏秋

冬の色小随ひてとる、**夢雲** 二年天下疫癘とあり、あつて百姓みちく失くしうむ土牛と作て**追儺**と

りつてとる、まうき異國の書より農事のことふ時と示さんとし土牛と立ち、**延喜式** 土偶人

十二枚高サ各、**豆府肉芍薬と氷らしを** 製法本

土牛十二頭、**歳暮** 親戚朋友と會り宴を設く

とる、**年忘心** 歳と年忘心といふ是年中の事と忘る

意、**年木推** 春用する所の薪と年内に**樵置**と

命四監収秩薪柴、又云孟春之月禁止伐木、注以盛徳在木也、然まハ春ハ木と伐らぬ、**夫木**

年の内小春の薪と伐ること、**高島の杉山川の筏士** ハハ、**年木** と積むと

年の市 来春用する物と悉く賣るあり、**五元集**

年の市とれをよが、**羽織** 其角

年の終の魂祭 秋のこの部魂、**年内立春**

祭の条不出

冬

冬

冬

古今 年のころふ春八来みりりとせむ去生とやいん
らやうとやいん〇貞徳曰年内立春和哥の題ハ春の
部を代々の撰集ややくハ巻頭ふ入
らふ連哥ハ冬ハ俳諧又冬ふ用じ 年の暮 あつふ

の暮 芭蕉 年の終 あつふ 古今 あらゝかのころのさうり
ふあゝとよ雪も我身もやうり
新勅 あつふ ちりぬる

在原元方 年浪あがらむ あつふ ちりぬる
水まらうらも 歳の末 あつふ ちりぬる
あ道助親王 歳の湊 あつふ ちりぬる

領子内親王 年の際、年 あつふ ちりぬる
の各残、年の冬、年の果、年み川 あつふ ちりぬる

如 年籠 あつふ ちりぬる
諸て年とともく是と年籠と称も諸
國ふあるとぞ其国郡の神社佛閣あつふと
京都をハ伊勢熊野あつふ近くハ祇園清水愛宕
ハ幡あつふとあり 猿蓑 あつふ ちりぬる

茶の花 あつふ ちりぬる
し注云瓜盧木ハ廣州ふ出ツ茶ふ似て
至て苦く洗し栴檀ハ蒲葵の属 あつふ ちりぬる

力草 あつふ ちりぬる
鳥島千鳥濱 あつふ ちりぬる
千鳥 小夜千鳥 あつふ ちりぬる

鳥島千鳥 あつふ ちりぬる
集乳鳥 あつふ ちりぬる
又智鳥 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
村千鳥 あつふ ちりぬる
浦千鳥 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
川千鳥 あつふ ちりぬる
夕波千 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
和漢三才圖會 あつふ ちりぬる
鶴 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
在て百千群 あつふ ちりぬる
とよて千鳥と称も鷗 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
不似て大 あつふ ちりぬる
其頭蒼黒 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
背蒼黒 あつふ ちりぬる
翅黒 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
尾短 あつふ ちりぬる
脛黄 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
水上 あつふ ちりぬる
ふ飛鳴 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
甚 あつふ ちりぬる
とよハ四十八品 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
本草 あつふ ちりぬる
雀 あつふ ちりぬる

千鳥 あつふ ちりぬる
冬 あつふ ちりぬる
ちりぬる

十月

智恵粥

たの部大師講の条不出

十二月著

欽政

公事根源 五月ふ同じし是檢非違使在京
輕重著欽若盤初○頸ふ在と
鉗つひ足ふ在と欽云刑且ふあり

り

十月立

冬之節

妻問注 立冬節 初五日水初て水次の
五日地始て水る後五日雉大水ふ入て蟹

ぬ

兼三冬物

偷立鳥ぬきつる鳥

暖鳥

たの部鷹鳥將の条不出

る

十月

御影供

御命講 法大師心と御影供とのふ
御命講 法大師心と御影供とのふ

上人の房州の人三國氏弘安五年十月十三日寂を年六
十一後醍醐天皇勅して大菩薩の号と贈りる甚盛洛

北妙頭寺の妙実兩と祈るの賞ふ因てありと云り武
州千束郷池上村長栄山本門寺と終焉の地と昨今

宗門の徒佛壇を掃除し紙あて製しる造り化と
うふ酒五 餅と供と○御命講や油のや

御取越 一向宗門の徒此月親鸞上人の
忌と修して忌日八十一月ある故ふ

御取越と 神集土日あり 和漢三才畜会
りふあり 神在 七日を 大社杵築大明

神の宮ハ出雲國杵築村あり大己貴尊孝子安天
皇三十二年垂跡昔ハ宝殿高さ三十丈今減して八

丈後深草院宝治元年八月廿九日建立三条院應
保元年始て三月会行る○毎年神祭七十二度就中

十月ハ殊ハ深秘の祭といふ○十月十一日より十七日は
と齋と称すこの間凡烈しく波のりき日一地化度

藻ふ乗ると海濱ふ浮む人らとことこれと云る國造
へ訴ふとの人ふ褒美ありこの龍蛇と曲物ふ盛るとく

神殿ふ納るとその蛇の形瘦蛇ふ似て錢形の斑文
連ると又五色の彩色重るとケ如し尾先ハ魚尾ふ似て

冬と

岐みく屈曲して宇賀神のと尾越の鴨も **貞享式**
おとし神祭第一の物と云、此名を

俗習鴨、往來の道と定めて山の尾寄より越る故
と云然れを初鴨と秋とよし鴨とむりこ冬とよせり

名、殊に俳諧 **兼三冬物** **小野炭** 山城国小野
の用と云べし、の里より出

る **温石** 大和本草 山東通志云掖縣より出、色
青白と兼ぬ潤膩玉の如し味甘く毒ふ

し、薬物小備ふべし、日本は温石といふ物あり、色白じて
少く青しやうあり、是山東通志ふらうせ、温石と同

物あり、 **落葉** この部木の葉 **追鳥狩** と
ふし、の条小併せ注を

し **草** **落草** **呼声** 各たの部鴛 **鴛**
呼の条注を

鴛 この劔羽 **和漢三才圖會** 其羽毛五彩に頭
の思羽 小玄纒あり頸小紅糸あり背小

き羽あり、摺扇の半邊のとし、俗に劔羽と称せ九月
多く至る家々庭池に養ふ然も鳧鴨と同居と鴨

ハ蒼色ありて目の後小白き條あり、翅尾黒く腹黄ふ
赤黒の紋あり、**大和本草** 鴨雄相愛して相離さず他

鳥不異あり、東垣曰二其一と失へ朝夕思ひ慕ひ憔悴
して死を昔獵夫らと以て其雄の首と射切る其翌

年又其水辺を通る時雌一隻ありと射殺してさふ翅
の内小去年射し雄の首ととあり、**新撰六帖** 池

けしきも、思羽の證奇と云の条にあり、**鴛鴦**
まむごのつらさ羽をそとつらあらまひの

七香 鴛鴦の姿の香小似るとりあり古詩 池の
池つらぬごのつらひ誰か香のうらららん

玉海集 どの香や張良 **鴛鴦の食** 西京雜記
あつてあつて足 友直 趙主燕皇

后より其女弟昭陽殿あり、飛燕不遺る書云鴛鴦
の襦鴛鴦の被鴛鴦の褥云 **壬二集** 霜やぬごの

会表のゆひと千世とくぬる病の池水 **鴛鴦**を
縫ひぬ、或は更さうとどの会とも褥ともりあり、

十月大原祭 中の子日 一年ふ西度あり、**小忌**
春のこの部注を

冬と

衣ころも どの部豊ゆたかのかの部神遊かみ 御火焼おひやく
明あきらの条あじ注しス 大前張おほまへぢやう 奇あやの条あじ出でツ

庭火にわびの遺い凡ふ九く此こ月つき諸しよ社しゃふ於おてことと修しゆとと○朔しやく日にち
智恩寺ちおんじ鎮守ちんしゆ賀茂かもち明神あきみじん○四よ日にち上かみ出雲いづも路ぢ幸ゆきの神かみ○八はち
日ひ所ところ々のの稻荷いなづま、いハは先まへ朔しやく日にちはは稻荷いなづまのの氏うぢ子このの児こ童ども、いハは
神かみ輿こしとと造つくて、朔しやく日にちよりより市いち中ちゆうとと振ふるて、人ひと家かまま入いてて米こめ錢ぜにをを
ととひひるるとと以もてて八はち日にちのの火ひ燒や料りやう、いハは八はち日にちのの新あらた御み供くハは社しゃ
家いへ松まつ本もと氏うぢ調てん進しんととりり、同どう日にち安やす居ゐ院いん有あ栖す川がはのの宮みや、いハは大おほ
坂さか高たか津つのの宮みや、いハは玉たま造つくて、稻荷いなづま天あま王わう寺じ庚かう申まを、○九く日にち貴き船ふね
結むす神かみ○十じゆ日にち太た田だのの社しゃ、いハは五ご条ぢょう天あま神かみ○十じゆ日にち粟あは田だ口くち神かみ明あき○
十じゆ日にち生なま玉たま、いハは十二じふに日にち三さん津つ八はち幡ばん○十じゆ五ご日にち所ところ々々八はち幡ばん宮みや、いハは今いま
宮みや所ところ々々神かみ明あき吉きち田た岡おか寺じ天あま王わう並なら坐ま上かみのの社しゃ○十じゆ八はち日にち上かみ下した
のの御み灵たま○十じゆ三さん日にち貴き船ふね○十じゆ五ご日にち北きた野のどののの外ぐわい神かみ社しゃ毎まい日にち
このこの月つき會あひ日にちはは柴しばとと神かみ刃やいばふふ積つみ、いハは神かみ酒さけをを供くしし、いハはここにに
ののちち火ひとと投なげげてて、いハはれれとと燈あかりもも、いハは児こ童ども、いハは帯おび解ときき、いハは多おほのの部ぶ豊ゆたか
口くち々々ふふ某あなのの神かみのの御み火ひ燒やとと拍たたとと、いハは置おのの条ぢょう注しス
注し、御み佛ぶつ事じ 報ほう恩おん講かうどのふふかかのの部ぶ注しもも、世よ俗ぞくわわぶぶ
も、いハは増ま山さんのの井いふふととり、

御祭みまつり 日ひのの使つか御み島しま 春日かすかひ若わ宮みやのの祭まつりあり、本もと社しゃ、
後あとの日ひのの能のう 七しち日にち 志しろろとと一いつ町ちゆうををううりり平へい林りんのの

中ちゆう不ふあり、法ほふ要やう集しゆ若わ宮みや御み殿でん天あま押おし雲くも命いのちトと云い、然しかども
若わ宮みや社しゃ家か秘ひ記きととも、いハは紀き事じ南なん都と若わ宮みやのの祭まつり夜よ宮みや、いハは
真ま福ふく寺じのの僧そう頭だう屋ゐ田でん樂らくあり、九く頭だうのの僧そう一いつ人にん兩りやう頭だうとと
りりふふとと兩りやう人にんのの義ぎをを兼かふふあり、長ちやう谷や川がは黨たう春はる日にちのの社しゃふ
泰たい詣ぎ野の太た刀たうをを携たへへ馬まとと奉ほう、いハはとと遍へん照しやう院いんのの渡わたりとと
りり、御み旅りよ所ところの前まへふふ於おてて流りゆう鑄しゆ馬ばあり、夜よ亥がいのの刻ときををりり
小こ若わ宮みやのの神かみ殿でんふふ神かみ幸ゆきあり、神かみ樂らく訖しやくとと後あとの燈あかり燈あかりとと
消けしし、社しゃ家か各かく神かみ体たいとと擁よう護ごもも、いハはとと閻えん中ちゆう旅りよ所ところふふにに
しし奉ほう、いハはとと於おてて燈あかり火ひとと張ちやう、いハは音おん樂らく相さう撲ぼくふふ次つぎふふ
とと修しゆとと當たう日にち廿にじふ七しち日にちいいわわくく、式しき日にちあり、寛かん正せい年ねん中ちゆう
ああれれをを定さだむむ、巫まじ女め及およびび伶れい人にん田でん樂らく申まを樂らくあり、供く奉ほうのの僧そう
奉ほう行かう職しやく人にん松まつのの下した鳥とり居ゐのの南なんのの方かたふふ於おてて、いハはととここにに
樂らく人にん上かみ越こ後ご守しゆ騎き馬ばををてて供く奉ほうもも、是こにこ関かん白はく代だい、いハはととふふ
又また倍ばい侍しやく樂らくあり、田でん樂らく藝ぎ術じゆつとと施せしし、後あとの樂らく開かい闔かんとんととふふ
とととと松まつ下した開かい闔かんとんととふふ、いハは後あとの樂らくのの始はじめ、いハは殿でん太た夫ふ新あらたふふ吉きち
事じのの詞ことばとと作つくつつてて万まん歲さいとと祝いわせせ、いハはとと開かい闔かんとんのの詞ことばとと云い、
冬ふゆと

その後舞曲も、金春金剛の兩座大夫供奉の時、船の立合と舞ふ、觀世保生兩座の大夫供奉の時、矢の立合と舞ふ、大小の鼓と以て、拍と殿後、大和國と領、武家各鞍置馬、長柄の鎗を出し、奉供の行列あり、夜ふ入て旅所より還幸、粗神幸の義ふ同じ、○日の使と、關白殿下より奉らる、騎馬、伶人は、黒袍冠の巾子、藤の造り、花と、この祭、八人皇七十五代崇徳院御宇、天下大饑饉、三年又大疫癘あり、關白法性寺忠通公、この祭礼の大願と、祭し、ば、天下静まらふりて、毎年行はる、保延二年丙辰九月二十七日、この祭の、○掛鳥と、春日祭のとき、鳥獸と以て、○掛鳥と、雉千二百五十六羽、兔百三十四耳、狸百四十二匹、是又保延二年より、春日先規より、地付と、六派あり、平田、長川、長谷川、葛上、乾股、數奈良の六宿所あり、掛鳥の事と主あり、○後の能、春日祭の翌廿八日、能藝と施、前日祭所の前、流鏑馬、伶人の舞相撲、細男、舞田、舞ありて、又翌廿八日、猿樂あり、故、後日の能と、

十二月 弟兒の朔日

乙兒の餅 一年中の朔日の終あり、俗、乙子の朔日と、和の諺、乙子の子とし子と、稱

大神祭 上卯 此祭一年ふ兩度あり、御佛名 夏のこの部、注を、

被綿 十九日、繞日本後紀、仁明天皇五年始

柏梨の勸盃 廿一日迄、て宮中、小仏名と置、公事根原、仁壽殿の御本尊と、つして、御帳の中、ふけて、南の額の間、又南北、小仏と、仏像塔形と、佛前、小香華と備ふ、廂、地獄変相の御屏風と、○被綿ハ、御仏名の時、導師並、小衆僧、被け賜、綿、江次第、勸盃、柏梨の勸盃、江次第、裏書云、柏梨の勸盃、ハ、むり、府の中將和氣の某、撰津國、拍

冬、

初め薑と起し黄花とひらく、四出芥のごとく、角と

結ぶと亦芥の如し其子均して田し芥子小似て

紫赤 **韭の花** 杜い花さき此いこのる **枯蘆** 芦既

色云 とらん秋の部ふ注を **枯野** 千草の枯ま

長して四五尺より丈をうふ至て其葉老衰して鐵く

莖筠白色と帯びて竹う似たりこまを枯ま

枯柳 葉尽く黄落せ **枯野** 野とらん露と結ぶ

冬 **かしこ鳥** 條目鷹の異名こ百山と越て

羽を高 **狩** 鳥獸小限らまて凡て尋求ると狩云

但し爰よ出せ、ハ専ら鷹狩とま

狩場 古事記 **狩場の雉** 注ふ **狩杖** 田犬

し、 **狩場** 獵庭 **狩杖** 不及

わの杖とのふ犬といまひる杖、雁鳥三百抄、狩杖ふ

櫛の水を用ふるあり、杖の長さハ其人の長さ小切もの

鴨鷹 鷹狩とのふと **鳥** 格物論 **鳥ハ野鴨**

沙石と食ふハ、蛤を食ひて消化せざる糞が随て出つ

凡鳥ハ雁より後ふ来り、春ハ雁より後ふ帰る○あぢむ

ら **天木** とらそむる水といふ あぢむらんあぢむらん

諏訪の入海 **西行** **鸚鵡** のむら あぢむらん

鈴鴨 **句合** **鈴鴨** の声 あぢむらん 月寒し嵐雪○あ

か、刀鴨と云一種、又尾長鴨ともいふ味美、茶と補

ふ、○あいさ小鳥ふ似て同じく、世常とがる丸きと

あり、魚と食む味よりらむ、○どうり長、アイサ真鳥より

大之首黒し、○みとあさ、あぢむらん、あぢむらん、鷺鳥、緑

頭、赤頭、うらぐ、鳥、真鳥、此外種類多し、枚舉

小違あぢむらん○水翁、鴨のつこと増山井み出せり、急就

章 **鳥翁** **顔** と濯ふ水藻を得 喜悅ふ注よ鳥公羽ハ

頸の上の毛、云々故ふ **鳩** 鳥の俗称 **石花**

水翁といふ尋ね、 **鳩** の部 **石花**

蘇頌曰今海旁皆こまあり尤多し、石に附て生む、硯

硯相連、房の如し呼て、蛎房とを、晋安の人呼、

蠔、南とす、初生止石の如し、四面漸く長し、二丈に至

る者、暫らて山の如し、俗蠔山と云、一房の内

冬
か

肉一塊あり大房ハ馬の蹄の如し小あゝ人の指の
面の如し潮の来る毎諸房皆開く小虫入るとき
いれと合し腹ふ充しむ○時珍曰牡蛎蛤蚌の属
皆胎生卵生あり独化生純雄なりて鳴る故ハ牡
の名と得るなり蛎ハ其蟻とらふ其粗大なり

十月

○石花の字ハ文選江賦に見えあり
春日祭 十四日此祭一年ハ兩度
侍の使 此の部五
あり春の部注ス 節の条ニ

賀茂時祭

出 賀茂時祭 王侍従と申奉るるとき
下西 公夏根源 宇多天皇御とき

狩しとまひたるハ賀茂大明神出現とまひて臨時の
祭となふべきなり約しうふこのありて寛平元年十

神樂

庭火 公事根源 大ニ神
と奉らせも備ふ ありぬ 衆の如くハ天照大

神の天の岩戸とてこもりとまひし時諸神のいり
申さるるハ天鈿女命 真辟葛と葛又とて日蔭と

手繼とてさし舞庭火とてさしりりくよりとまふる
事我朝の風俗神代よりあるべき也 ○阿知女 梁塵

抄阿知女作法 阿知女於於於 阿知女於於於 ○一
禪閣脚説あちの作法愷成所見あり但鈿女とわが

といふやあとうと相通るハ天鈿命の岩戸の前
俳優とあり侍ると今の世よあちの作法らや

おおハ笑ハ声あり日本紀ハハと笑声と云
ハオハ又五音通るあり ○東三條の御神樂 兵範

記云仁平二年十月十七日丁未東三條の御神樂行ハ
る云 拾芥抄 東三條の第八四條院誕生の所或を重

明親王 神樂歌 千歲早哥 吉々利々 星 得錢
の家云 子 木綿作 書目 弓立 朝倉

其助 竈殿哥 酒殿哥 此ホ 神遊ハ哥 採物哥
これ神樂のくくいのあり 大前張

小前張 或説子大嘗会の時近江の坂田郡より老翁
の参りて稻と着くとの時ありき年の

つるハ樂とてさしりりくよりとまふる

の始ハ脚即位の始ハかくとてハ如此とくだの事

哥とてさしりりくよりとまふる

つるハ樂とてさしりりくよりとまふる

冬 加

杜夫魚 この更ふいふべうも九能優家十一月朔日と云

相祝 元日のことなりて芝居の正月と云

山海名産圖会 越前の霞魚ハ此国の外ふありて杜

父魚 父魚ハ此國の外ふありて杜

類あり杜父 杜父ハ此國の外ふありて杜

寒苦鳥 五雜俎 五臺山小虫の如く

て四足肉の翅あり 夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

寒 寒と云て號し得過且過と云其糞鐵の如く状

是 佛經 印度大雪山鳥あり此鳥夜寒と苦て

鳴 鳴寒苦身と責む夜明けハ巢を作らん明て

今日 今日死むることと云亦明日と云何故小巢

と造 と造て無常身と安穩ふせむ玉葉 あまねく

雪 雪の深山ふく鳥のあまねく

十二月 被綿栢

梨勸盃 この部御山 名の余注ス

鵲始巢 雛乳 礼月令 鵲始巢

此記 此記 丑月之候 丑月十二月也 雞乳同上 大寒

之候 之候 十二月中也 一説云 十二月始めて巢

ふ ふ戸開ふ太歳ハ背き太乙ハ向ふ未歳凡多きと

乾 乾ハ製しと云 乾ハ製しと云 乾ハ製しと云

秋 秋の部 鵲の橋の条注

加小拂 滑粒言雜談 ほとり年の終

内芭蕉 僧尼山伏の輩ハ金銀米錢を

と供養 と供養し施行するを俗ハ加小拂ト云 具ハ加小

禩 禩ハ祈禱ハ其身 禩ハ祈禱ハ其身

禩公祀 五雜俎 俗皆十 二月二十四日電

天 天ハ奏て是日婦人女子弁と持ス云 俗猶これと電

西陽雜俎 西陽雜俎 竈神六女あり 常月月の晦と以て天

冬 加

不上人の罪と白も大あつもの紀と奪ひ小あつもの
算と奪ふ○我俗十二月下旬修験と招きこゝる神と祭
るこれと竈夜又竈注連
とつて五月九月又あつし
寒の入 大寒小寒此両日
小豆餅と食は北

寒の俗是と
寒、念佛 滑誓雜談傳へ聞くは往
古よりありしとあり京田

舎りて僧俗に限りしと寒三十日曉天よ及びて山野ふ
出高声よ念仏と唱ふことと寒念仏といふ近年
よ及びて京の在俗男女老若と隔てても五三昧

廻りて寒夜よ鉦をふるも行遊喧ま
垢離 修験の徒寒中道路並橋の上ふ立ちく水を
おひ錢をむらり是と寒垢離といふ是寒

中の水 寒、聲 奇曲よ遊ぶ者寒中朝暮大
行あり、寒、造の酒、寒、曝 時珍曰酒ハ臘月
或ハ寒、寒、造の酒、寒、曝 釀造る者數十

年と經て壞しとるしと老酒とらふ 紀事 背
寒中新井の水と汲み桶或ハ壺盛てこゝと収め

漬て後陰乾まことと寒とらふこととつてふり
寒の雨 寒中の雨といふ鳥
羽の田つや寒の雨 芭蕉 寒月 月 寒

也屏合じふも 寒の内 くら猫のこゝもつれ
霞とつていふ荷分 ちる寒の内浪化 門

松營 飴松賣 紀事 山人稚松翠竹と賣松ハ
飴竹賣 子の日の松と林し竹ハ飴竹と云

竹の子 子の部孟宗竹 掛乞 貞享式掛乞
の糸は注を、 と冬とさるも

よ 兼、又、物、夜、興
まこと今の場合よりハ秋の
よふとつてぬを

引 獵師のこゝろよヨ引といふ獵の内あり狸狩と
くくせと冬の夜山中獸と獵る小犬と引ゆる

十月吉田祭 此祭一年兩度あり
夏のよの部は注を

十月 此祭一年兩度あり
夏のよの部は注を

吉田大後 節分 紀事 節分の夜ト部家吉田の
齋場の内陣わて清夜と修を神

冬 加よた

一人一人は従ふとの式四月十九日の夜の行法は同
節分の朝ト部家宗源殿小於て神道護摩と
修之疫神齋札三千枚と出
諸人求めて門戸貼る
十月 煖爐

會 日の部如問 **達磨忌** 廿日 紀事 梁の大道二
の条ふ出 羊十月五日入寂大

小の禪刹悉くこれと修も **元亨** 紀書 達磨者南印度
香至王第三の子と蕭梁普光元年庚子支那ふ来り
武帝のとき小茅一義と説帝契も乃江と渡
魏ふ入高山の少林寺ふ居九白年と経て天竺ふ歸
兼

三叉物玉の塵 玉の屑同じ **たひら雪** 此部
雪の条ふ 併せ注と 雪とらふも

垂氷 つの部つら 注不 **炭團** 及 **湯婆**
併せ注と 湯婆 湯婆 湯婆 湯婆

和漢三才圖會 大年保唐音飲按湯婆銅と以てこま
と作る大と枕の如くありて小き口あり湯と盛樽の傍
ふ置て腰脚と暖む因て婆の名と得り竹夫人と此
と寒暑懸隔の重器と云の黄山谷湯婆詩云小瓶

暖足 **足袋** 草とハ 和漢三才圖會 單皮足袋 俗踏
鹿の皮と以て半靴とも名づけく多鼻と云ふ單皮の
二字を用ふ一凡冬ハ皮と用ひ夏ハ棉ともちふ

大根引 未薑と抽んで小花とひらく紫碧花夏
の初角と結ふ **貞享式** 大根引此詞ハ冬の常用あり大
根と畧して音語よと云ふ京家のワナ引ハ效ふハハ

刀鳧 の部鳧 **鷹** 時珍曰鷹鷹鷹鷹と以て
の条ニ注ス 故ふこれ鷹鷹鷹鷹と云ふ其頂ふ

毛角あり故ふ角鷹と云ふ其性猛喪故ふ鷓鴣といふ
大和本草 鷹鳥の類三種あり鷓鴣の類鷹の類 鷓鴣の
類 和漢三才圖會 鷹の尾十二枚長五六寸よりく
合て末ハ四く黒白の重紋あり天寒よあふこきハ尾と
墨むと一枚のどくも尾損傷ハ過きハ漆樹の汁と

取て他の鷹の尾と接尾の下ふ三品の毛あり尾末毛
とハ乱糸袂衣下の尾と石打と云ふ尾の端の白き者
と約華といふ背の毛と母衣毛といふ其股よ出る白
又

毛と芽花といふ嘴の脇の毛と齒黒付といふ肘の内
の毛と水橙毛といふ脚の草履と着る処を無毛腰
といふ共は皆俗称なり○雀鴝、兄鴝、鶺鴒、鷓鴣、鷓、
角鷹、サシハ、等の種類あり、各頭字の部に分ち注

鷹狩、鷹匠

追鳥狩、鳥叫、偷起鳥、草
落草、ちり草、鳥立幕、列

綱、狩、狩場

○本朝より鷹と肘とを、百濟の

呼声

酒の公より始まり、仁徳帝の四十年

秋九月阿弭古異鳥と献を百濟の酒公とてこれと
養ひ酒公章縁とて其足をつけ小鈴とて其尾

よ着て腕の上居ると献を始て鷹飼部と定む

又酒公鷹と居て帝の狩奉從て以て雉と鷹其後

兵部より鷹司あり後冷泉院帝の時出羽の國司

源齊賴と飼と放つ最も神妙と得るとも

○追鳥狩、雉子狩、列卒と以て雉子と追出るとも

あり又田野は群居る諸鳥の追鳥狩もあつし、○

鳥叫、秋枝折、鳥さけいとされとも鷹さぶるとも

云、又狩人の声と立て、鳥と追るともいふとて○

偷起鳥、いぬ、いぬ、いぬ、鷹鳥狩といふて草をいふ

とて鳥のいふとていふ又いふとて鳥雀といふ

草のつけとていふ○教草、落草、藻塩草、とて草と

いふ鳥ある処とていふあり、鷹の鳥と追落しとて

所を落草といふその落草の上と羽と引て知らるとも

といふ○力草、藻塩草、鳥と草を追ひいふとて鳥

とていふとて鳥の落草を取と草とていふとて

是力草といふとていふ草、鷹鳥といふとていふ

て草とていふ飛をいふ○鳥立と慕はる鳥の立

るといひて狩人の行といふ○列卒、藻塩草、鹿狩

小繩と引て鹿と追出すといふ、鷹狩と追鳥狩

といふと列卒入事勿論ありその外もあつし、鷹匠の士

來の如くといふと列卒といふ、鷹の鈴、鷹書、鷹の

○呼声、鷹とよふ声あり、鈴著る、鷹の

鈴板とていふさき金で板と造り尾懸あつけるとの

上は鈴のありて鳴あり、鈴師並は鈴の付あり

鷹、鷹胡、鷹

梁布、鷹二百首抄、梁ハ木と用とる、
春ハ梅、夏ハ桐、秋ハ檜、冬ハ松、外

冬、た

月令廣義漏刻益四十一刻夜 **吞魚** 東匡室監

五十九刻 杜詩 寒日經舊短 **吞魚** 魚俗名

大和本草 大口魚 北土の海人多く、南海の生せむ

西洲の北海の生せむ、朝鮮も甚多し、寒國も生せむ

冬春多く捕る 和漢三才圖會 夏月全くあらず、故

小俗鱈字も作る、味鮮魚佳し、腹を割て甚佳し、

こまごま塩鱈とり、其鯛煮て食へし、或ハ酢漬し

食ふもあつ佳し、○雲鯛、吞魚の鯛、雲鯛、菊鯛と

わふ形色と **雞印酒** 寒氣と禦ぐ **十月**

以て名づく 飲之、依て季とす

當麻祭 十日、一年一雨度あり、夏 **鎮靈祭**

中寅 ○吉田八幡の祭、公事根源この祭、八人の魂

魄の離遊を招き、身中鎮るの寄持あり、

宇摩志麻命よ **大師講** 智者大師の

こと起り、忌日 廿一日

より廿四日、至る諸山、大師講と修む、比較 東嶽日光

の三山、廿一日より廿三日、至るまで、昼夜法問あり

と論議し、一山一院づつ、会場と勤む、これと天台会

と、俗もまこと大師講と修し、各赤小豆粥とく、枯柴と折て箸とす、是と智慧の粥とす 仏祖 蓮載

天台智者禪師、開皇十七年十一月廿四日、寂す、大師

諱ハ智顛、字ハ **澤庵清製** 九十一月中旬よ

德安、額川の人、下 澤庵 清製

清と製す、○青藍云、沢庵和尚、これと製

を故小名くとり、愚按、これと製

武江品川東海寺、これと製

と、大根清の壘、これと製

尚の墓所の形とよく似、

故小俗沢庵清といふ、 **十二月大徳寺**

開山忌 廿二日 大徳寺、山城国葛野郡紫野小

和漢禪刹次第 大燈国師行状 云、師諱ハ妙超、宗家、

其号あり、播州揖西縣、これと製

士、これと製

と師を成長して、これと製

冬 七 八 九

武二年十二月 宝船敷 紀事 節分の夜 船と

廿二日逝去 白紙貼け諸臣賜入

地下良賤も西船と余の底も布て寝ふ今夜吉夢

あれども来歲福と得たらん悪夢と見るとも八里朝

これと流水も付て悪夢と流るとも和俗この船の内

小種々の珍宝と画くケもも小宝船と称と近世これと

梓も鏡も児童市中小賣る **居家必用** 船も兼日月

入る夢る時ハ吉船と渡ると夢るともハ大富貴と

主る也 ○今の俗正月二日の夜小宝船と布ハ **鯛味**

元禄年間より遙く後のふりりぬ **鯛味**

噌 鯛味噌ハ肉味噌と同じ **礼** **ろ** **十月**

酒と以て煮炙して食之 **袖の時雨** 涙の雨もさうふ同く **蕎麥**

新蕎麥と秋と **早梅** 范至能梅譜云冬

至前已開故得早 **兼三冬物雪車** 北越雪譜

物雪國才一の用具あり人力を助るとも船と車も

同じ且作るといひ易きハ面ととも 形ち輪ふ

如し大小定りなく我る物もち 我が地車の

がいて造る木材ハ堅木を用ふ 我國の雪冬ハ凍らざる

ゆゑ冬ハ輪とつへハ雪も落入て 搦事ありハ輪ハ春

の雪鉄石のてく凍るる 正二三月の間は用ふきも

のあり其時よるると里俗 輪道はありしとハ俳諧の

季寄小雪車と冬ととも ハ誤りんんんがとて雪中の

物もれハ春の季ハ似気あり 古寄も多く冬ふあり

実ふもわとも冬として可なり 山中蕉ととも乃

薪と雪車も積も引帰る 或ハ山も曲りあるハ件かんの如く

ふ縛りたる新の輪も乗片足と遊ぶ してこれとて指と

とハ船と走らるる 此術学びて自然に得ると

ころハ輪と引おられらるる 奇と謡ふれと雪車奇と

いハ則蕉寄あり 漸くその家よりつくとときその妻子

その奇を聞て夫の帰れらるる と知り出迎へたときけく家

小至らむハ青藍云俳諧 歳時記ハ近來雪車の句

作あるとともふ多くハ雪車 も乗といハ雪車ハ薪と積

冬

董集ふとえ入、今の入芝翫頭巾ふ似入り、**五元集目**

むりときまづつきんのうきせうれ、其角 **用簷箱** 袖頭

巾一名御高祖頭巾とのみ物、さき草紙をに見えを、

宝曆八年の写本、愚痴拾遺物語ふ、一兩年以前より

とらきつづきんもあふ、袖頭巾とのみ、其原ハ順光とのみ

坊主品川へ通ふ高祖日蓮上人のうづり物より思ひ

つきーし、〇丸頭巾ハ今のハ大黒頭巾

のこらひあふ、しきと頭巾未考、

て冬、**つえたき** 芋環ふ凍、**雀鷄** 和名まじり

雀鷄ハ鷄の雄あり、**月の水** 御傘冬、ちりたりたふさ

ふあふ、但し水ふ移りとも月の句体あふ、水辺とも

べし、**新撰六帖** いひまづ、ひよりりらじの寒ぬれど水

あき空の水、**月牙** さもるとい

る月影象、**十二月月次** いて冬あり

祭 十日〇一年は兩度あり、**追儺** 鬼争らふ **周礼**

ハ黄金の四目あり、玄衣朱裳、玄と執り楯と揚百歳

と叩ぬ時、**雛ひも**、**五雜俎** 雛ハ以て疫と駆く古人最

ること重んぶ、漢より唐に至ると、**宮禁中** ちふこと

と行ふ、護童假子千餘人、至る、王建の詩よ云、金

吾除夜進、**名書** 袴朱衣四隊行、**今** 即民間

この載あり、但、**再鍾植** と、**燃爆竹** とも、**公事根源** 天

舎人寮鬼と勤り、**陰陽師** 祭文とりて、**南殿** の刃

着てことと讀む、**上御** 以下ことと追ふ、**殿上人** 御敷の

方小立、**桃** の弓、**蘆** の矢、あてるとと射る、**〇雛**、**江次** 才

裏書、**確** と行ふ、**晦日** 前、**つと** 二日、**公事** 根元、**晦**

日世 問答、**疾囊抄** 亦節分とあり、**接ぎ** とも、**〇**

華む、**金吾** 除夜進、**確** 名とあり、**節分** 後のこと、**〇**

兼三冬物葱 根ふら、**大和本草** 大葱ハ五月

分栽、冬春さうふあり、**肥地** ふふうくうきて、**漸** とも、**〇**

白根長大云、故、**小根** ぶうと称ス、又曰、**和名** 妙小、**結名**

紀と云、**紀** の一字と名々、**子祭**、**子燈心**、**大黒天**

故ふ、**一名** 一文字とらん、**冬**、**つ**、**ね**

冬、つ、ね

醋を味よく、鍋焼 貝焼 皆其食物の調味と混
みたるものなり

納豆汁 本朝食鑑 教名納の字未詳
或用ふ 或いは僧家の宿衛に納豆

山祭 上卯〇一年ふ両度あり
夏のみ部を注す 十月内侍所

御神樂 公事根元 天子内侍所を行幸て御拜あり
刀自祝詞をいへとあり内侍所の前ふ主
殿寮慢と引く官人庭火と云ふ本末の座と二行ふ故
く云 紀事官人内侍所よりして鈴と上る是神樂と
奏さる義に御供米とありと云ふと御又米とありと云ふ人衆
の音と聴て仮りふ鶏鳴とありて帰る事と年と云ふ
とつふこのごとくもなきは米年
何方に向いてとも障破ありと云ふ
世の部前分 肥前國長崎をとし
の条は出づ

長崎の柱餅 肥前國長崎をとし
の餅の餅と家の柱へまきと付あり正月十五日左義長
の火あてると云ふと矢て食ふありと云ふと柱餅と云ふこの
事西鶴う世間胸等用

りむ 十月村時

雨 漢土よりハ秋種と下と本邦
るとのり、麥蒔 十月種と下し四月熟と云ふ

兼三冬物六の花 雪の事ハ韓氏外傳九草水
の花多くハ五出雪は花六出

十月宗像祭 朱子語録地六ハ水の成豊雪
ハ水結ひて花とあり故ハ六出

咲の梅 室の内或ハ土藏の内ハ炒火と儲けと云ふこと
暖む時ハ其火氣小感と云ふ忽ち聞くと云ふ

十一月胸搞 俳諧歳時記 年暮の暮ふ人家の門ふと云ふ

十二月

十二月

十二月

十二月

十二月

十二月

十二月

十二月

申されたるは降じまうし
初雪の宿と附く
十二月 温槽粥

粥八日増山の丹五山でも入禁中でも有と
行事温槽粥 粥焼栗菜ヲコメカキリロカシテ
中ラスエ、三水記本朝も臘八粥と温槽粥と名く
今日造る所とて、小昆布、市粉、大豆、粉菜と相合し

ことと製法も是秋尊成道の日より、傳燈録 秋迎佛
檀持、非非想と字び二月八日成道、夏の正月ハ
傳燈録十二月八日と寺院を臘八のハ、波等

刹等の寺俱ふ五味粥と説く名と臘八粥云
晉書雜記 世より人の妻を白綿巾と以て頭面
と覆ひ腰に赤き前帯と掛手ふ蓋と携へ過ぐ人家
と懸て米銭と乞ひ、ふらり波等と稱し、廿日ふ至く

止むと世に諸寺にハ諸國あり、波等と云ふ京師
ふの、ありて
他所あり

兼三冬物 鴨 鴨のく
鴨のく
鴨のく

十二月 荷前の使
吉日 荷前の使十二月十三日或
ハ吉日と云ふなり、波等

抄ふと云ふ、諸國より献る御調の
と十陵八墓へ奉り、付て、ふふとの使、
の部ふ
併せ出さ

く 十月口切 紀事 此月良賤のく、茶会
と催し親戚朋友と歡宴と云ふこと

壺の口切といふ、今月の始より臘月小至又九膳食と
会席と称し家の豊儉小随て佳肴美味と求むこと
と調梳折布小至る迄とて新まを、中 九茶事蓋

の間、糊と以て堅く紙と貼本風濕茶と侵さんことを
念ふが故あり初冬小至て小刀と以て紙と貼し合縫を
截蓋といらく茶と取これと壺の口切といふ、利休曰

壺の口切の節ハ橙黄、橘緑りの時
○口切や汝とよぶハ金の事 其角 **兼三冬物**

懷爐 湯婆温石の類病身虚 蒸書、蒸漬
弱の人懐と暖るやあり

本朝食鑑 蒸書の葉と採く淹菊と、収蔵これ
と蒸漬と号し、年と經て又佳く江州の製造と近江

漬と号し珍と号し、年と經て酸味と生むるものあり佳
あり、賀茂の里人の造ると酸葉と号し、これと實美ふ

冬、ねく

朽葉

一説ふらち葉ハ色と結びての冬あり朽の字重き故あり

くさくさ野

八雲御抄冬の野とのハ〇冬野の枯くさくさとのハ百濟野と混ぶるも〇くさくさ野のさあか下ふあき鳥

角鷹

鷹の類あり大小悍者其の形也雌雄大小

皆鷹小同じ鷹より大あり三倍せん雖ふ似て小く天和本草中上ふ角鷹とも養鳥と捕ふ草

枯

草枯ふ手おてく 和漢三才圖會鯨鱈字海鱈勇魚兼

鯨突

二伊佐奈ノ状ち畧鱈小似て肥て田く長く周りと等し其色蒼黒く鱗あり鼻の上骨高く起り頂の上頰の前小潮と吹かあ人口開く下唇上唇より長くして頰の前ふ出て舌もまた廣し九鯨六種あり性喜て鰓と嗜て諸魚小敵せまて海船若尾鱈小つくとまこハ必覆をも冬ハ北より南へ行春ハ南より北ふゆく肥州五島平戸辺ハ節分の前後と盛るとも紀州熊野浦ハ仲冬と盛るとも捕ふ鯨と刺鯨と呼ぶ森

十月 獻履襪

崔浩文儀云近古婦人常小冬至の日と以て履襪

とりの樺木と以て柄とあり鉾の頭は繩と着て船の柱ふつとく其鉾鯨小中るときハ柄ぬけて肉ふ入鯨の動作小ちとがいて深く肉ふ入て板を鉾の柄扱るといふも繩着てある故小失をも一船の進退と掌と人と呼び指といハ長き袖短き衫と被て宛も軍船の如し近頃大繩の細と用いて豫めここと繫き木柱と擲故ふ百り一失

空也心

言日曉の鉢叩 空也上人ハ天禄三年九月十一日

寂も年七十と元亨歎書ふとそり〇空也堂ハ極樂寺と号も四条坊門の南堀川の東ふあり鉢叩示此堂と守ふ傳ふ云極樂寺ハ元三条櫛笥ふあり櫛笥道場と称もむり空也上人勝光夜々執行念佛と唱へ浴中と巡る北山小住ととき毎夜鹿来る上人其声と愛して閑居の友とま一夜来らむ心冬

と瘵し血脉と調ふ故ふ是と瘵
食の諸獸も又さきと食者
や十月八

手花 大和本草葉の形葉の如く又此の葉
の如くして甚く大なるは盤の如く冬爛落
む葉の如く一かして岐多しと云ふは白花と

開き黒き實あり毒あり木の高五丈六過
三冬物 **山眠** 野遊録冬山寝
十月山

科祭 上三日〇一年の西度あり
夏の色部小注
山神樂

内侍所の神 **山の神祭** 神代卷伊弉諾尊
祭ありと云ふ 軒邊突智命と新

て五段と云ふ此各五の山祇と化生と云ふ此山の神あり
山林ありて畿内の民この月山の神と祭る是火焼

祭る山の神の社の辺の樹上小幣と
きりつけ神供と備へ焼火と云ふ
十二月厄

正月十九日小至 **厄拂厄落** 紀事四十二歳の
て解拂ふあり 男子自ら擲鼻禪

と落ま是と云ふややくやく厄と拂ふの義あり今
宵乞人綿巾と以て面を覆ひ自疫拂疫落と称し

終夜街衢と往來を〇唐土や巧者のもくもらひと
りつと云ふと云ふ

十人群とあり神思小装ひ男婦鑼鼓と以て門と
進み銭と云ふと云ふと打夜胡と名く又野宗の類

目鱈取 和漢三才圖會八百字奈岐北國の川沢ふ
多し大抵尺をり大ありもの二三尺背

蒼黒くして光あり腹の色稍浅し其首尖らば口裂
きして四つ歯細小く針鋒の如く兩眼の深小各

七點あり目の如く星の如く鱗の次如し目と云ふ
八數あり故ふ名く〇江海處々あり信州諏訪の

海小取りのを産しと云ふ上諏訪下諏訪一里あり冬日
氷もちて厚二三尺よ及ぶこの時よ至つて鱈と云ふ

先氷の上小家と營む小火と焚て穴と穿らるるの穴ふ
柱と建漁者の休む所と云ふ又細或ハ繩と入へき穴と

冬 ちまけ

栗やこまを焼火と以てまきて遊園と入共餅と以て物
くことこの数夥し氷多きとせむらうまきと擗と用ひ

ま十月松風の時雨 松風と時雨の音ハ

兼二及物 週炭 凡茶会の炭又花ハ上手下手
あり故ふ未熟の人常ふ敷

こまこと習ふ同志相集こと上座より下座小至る迄
交く炭と置花と神むの業とまは是と廻り炭又週

花と **十一月** 當宗祭 上卯日 松尾祭 同日

一年ふ兩度あり夏 **十二月** 豆打 せの部節
分の条ふ

注 **け**十月 玄猪 亥の子
亥の子の餅 御覽

初冬其月亥より建を亥の口亥の刻より餅を食
へむ病ひまし **錦繡万花谷** 此餅と食へば万病を除

く **政事要畧** 亥多子ある者あり毎年十二子と生
ひ聞年ハ十三子と生ひ故小婦人こまと羨とく此

日小至り餅と供して神と祈るのの子のこ其始
詳なりととのこと延喜式と載らるるこれより

つるこまこま一亥の子の餅ハ大豆小豆大角豆胡
麻栗椀糖此七種の粉と合せてつくより **正親町**

公通卿の抄并御湯殿記ホよその式委くくもるり
〇一説ハ振勿能勢郡木代村小門太夫とつゝ者任せ

まどの家代々亥の子の餅と貢まとの先神切皇后
み起りむり此所及び切佃大丸の近里ハ山城八幡

の神領よりよりて今善法 **下元日** 水官野忌書
十日

故事 正月元日ハ天官福と賜ハ七月中元ハ地官財
と赦と十月下元ハ水官元と解ス **事文類聚** 王

旨要云下元三品厄と解を水官主祿百司ハ
間の善惡を檢察し天賦ふ諧て進呈

十月 冬ころ 一書ハ冬ころとハ立
冬ころろろとハし 冬牡丹

天和本草 冬牡丹八月より葉出て十月より花とく
臘寒の時も花あり元此ころハ人切を以て天地造

冬 けふ

化の力にぬきとてこれと成怪じり
様景 此寒と牡丹の花のまの標集

兼三冬物

雪吹 雪爪相交ると
雪吹倒る

北越雪譜
國よて、雪吹

と花のちよとふ擬し。詩作詠奇あ
まごき國よてハ雪吹ふあ者ハ九死一生

衣雪

玉海素哥枕とくくもる衣雪山姫の味道具あ

ら 衣雪のうりてハ根うり上のまき雪の氷の

水と蒸ゆると氷の衣とふ同く雪の物と
厚く蒸ゆると衣とてこりる

士の雪 御今ふハふゆりふりふり雪ハみゆ月
望ふけぬれハその夜よりふりふり

の哥と引て雜と無言抄ハ赤人の田子の浦の哥

新古今冬の部ふ入りて冬とま句体おもふ但し

毛吹草 冬草の草のふいふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

敷衣 小衣 和漢三才圖會衣衣ハ古き衣衣衣情
紙衣 百氏集 鴛鴦尾令霜花重

枕舊衣雜與共ハ紙衣ハ紙少造るるるるるるるる
の者の用る。テントシ是より猿蓑た目ハ我手

のあし紙 蒲團 本草綱目蒲蓆敷名云薦
皆蒲及び船蓆と以て

為る精粗異あり人龍鬚草と以て蓆も
今縮布と以てとて為るもも蒲團と

正字釋 冬小魚と取ハ柴と多く鹹けもの
内小餌とこれを江ハ沈り置ハ江中の魚集り入其下

ふをくひ細と入引上て取あり城川定伏見の江
多くこきあり夫木ふりつけしとら下ふしと

のふとれき身と 俊頼 河豚魚 河豚汁 腹立鰻 古方
西施乳 邊注

豚ハ猪の小さ者其性よく嗅ふ故ハ憤豚の称あり
魚中鯨鮫とよハ嗅ふ故ハ河豚の称あり北山經

其腹臍と重し呼て西施乳とハ陶覽云河豚魚
小こととてハ擲及び大魚敢て啖をも惟人小毒

のふわをも又よ物と毒と煮るとハ煤焙中下落
る事と忌む肝及び子小大毒あり食べをも

冬 滑

冬 滑

難於和産小腹立類として河豚小似て小き魚あり味い
劣る是と地小投又ハ木の枝と以て動かし八魚腹
とまじ鞠の如くふふふふふふふふふふふふふふふふ
大山際より泡の如しといふ。是ふらん難波の浦又
環の浦をくまふ待るらん河豚の類らん冬風
季小用ふべきを○俗鱧字と用ふ誤(鱧ハ冬)
骨董集甲陽軍鑑云熱風呂好

呂吹大根

吹申さる云、本朝諸士百家記凡
呂とりて多き条云上手の吹手二兩人云、伊勢人の
物語と聞ふ風呂と吹つゝハ空風呂ふあふと云、垢と
ぬくわの尻呂小の者の身上小息と吹つけて垢よく
ありちりまれば息と吹つけて所小潤ひ出て垢よく落
るちりまれば息と吹つけて大根と熱く蒸
して煙アの立むとあると大根の尻呂吹つゝも息と
吹つけて食ふさようけ凡

冬籠

寒風とよせきて
呂吹ふ似たるゆゑありん
居室小籠ると

冬之梅

大和本草ハ朔梅ハ八朔のころよりひらく花小うしてハ
重なる西土おとすこと寒紅梅とつハ冬至に至ると多く
ひらく梅の魁あり畿内の寒紅梅ハ西土おとす浅木山と
つハ九月より開く八重あり但九月小開くハ狂花ありん
臘月小開くと正時と云ふ
冬木の櫻

冬之蜂

今ハ世ともひけり
冬之蜂 且葉

冬之蠅

續虚栗少くまればなる
人冬のとて 其角

冬之櫻

小樹あり花葉彼岸櫻小似てその枝
冬月花とひらく盆ふちりく
夏木立ハ茂るをいひ
冬木立ハ葉の脱落をいひ

冬之萩

寒氣と防げん料ハ凡のうらやうと云ふこと
砂よけ凡よけと北の方ハ蓮を張まらし
すくく冬向の舟

冬之草

芭蕉○草木の凋冬枯るとも冬簞と云ふ古今の
ふらふ冬をりせる草も春ふらふる花と咲く
貴

冬之萩

今ハ世ともひけり
冬之萩 且葉

冬之梅

大和本草ハ朔梅ハ八朔のころよりひらく花小うしてハ
重なる西土おとすこと寒紅梅とつハ冬至に至ると多く
ひらく梅の魁あり畿内の寒紅梅ハ西土おとす浅木山と
つハ九月より開く八重あり但九月小開くハ狂花ありん
臘月小開くと正時と云ふ
冬木の櫻

冬之蜂

今ハ世ともひけり
冬之蜂 且葉

冬之蠅

續虚栗少くまればなる
人冬のとて 其角

冬之櫻

小樹あり花葉彼岸櫻小似てその枝
冬月花とひらく盆ふちりく
夏木立ハ茂るをいひ
冬木立ハ葉の脱落をいひ

冬之萩

寒氣と防げん料ハ凡のうらやうと云ふこと
砂よけ凡よけと北の方ハ蓮を張まらし
すくく冬向の舟

冬之草

芭蕉○草木の凋冬枯るとも冬簞と云ふ古今の
ふらふ冬をりせる草も春ふらふる花と咲く
貴

冬之萩

今ハ世ともひけり
冬之萩 且葉

冬之梅

大和本草ハ朔梅ハ八朔のころよりひらく花小うしてハ
重なる西土おとすこと寒紅梅とつハ冬至に至ると多く
ひらく梅の魁あり畿内の寒紅梅ハ西土おとす浅木山と
つハ九月より開く八重あり但九月小開くハ狂花ありん
臘月小開くと正時と云ふ
冬木の櫻

冬之蜂

今ハ世ともひけり
冬之蜂 且葉

冬之蠅

續虚栗少くまればなる
人冬のとて 其角

冬之櫻

小樹あり花葉彼岸櫻小似てその枝
冬月花とひらく盆ふちりく
夏木立ハ茂るをいひ
冬木立ハ葉の脱落をいひ

冬之萩

寒氣と防げん料ハ凡のうらやうと云ふこと
砂よけ凡よけと北の方ハ蓮を張まらし
すくく冬向の舟

冬之草

芭蕉○草木の凋冬枯るとも冬簞と云ふ古今の
ふらふ冬をりせる草も春ふらふる花と咲く
貴

冬之萩

今ハ世ともひけり
冬之萩 且葉

冬之梅

大和本草ハ朔梅ハ八朔のころよりひらく花小うしてハ
重なる西土おとすこと寒紅梅とつハ冬至に至ると多く
ひらく梅の魁あり畿内の寒紅梅ハ西土おとす浅木山と
つハ九月より開く八重あり但九月小開くハ狂花ありん
臘月小開くと正時と云ふ
冬木の櫻

源氏朝風の巻冬の夜の月

冬の月 小雲のひらめく空の月

うさぎの月の身より此世の外のこと

月の中を歩くとつり月をたぐ

わらわのけさる 冬の日 冬の日のあや

冬の日 暮らなり半石

行燈で水菜より 冬田 冬田武百明

冬夜 冬枯 冬草 冬草枯て

冬枯 冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

冬草 冬草枯て

り所ありとて住家として細代と司る者との細代守細代人とすなり様葉と云ふこと教珠もらもて細代守大草と云ふこと也
音や夜更の細代抗林陰
厚水 神并記 北方小水
日と思やもらまら

霞 玉わらん 大戴礼 曾子云
わらん酒 陽の専気霞
くくくわ水子葉

あふ蓋盛陰の気雨水ふもる時ハ疑滯して雪もあふ
陽氣搏してとと骨と相入るるも消散
下り水小因て霞もあふ 霞酒ハ南都の産也又
雲酒もの酒中霞ふ似る糟あり 天子集玉より

も酒あふるる霞れ 年浪草小霞地の錦霞
ホを冬季の部ふ出せるいころハ古抄も雑とて
あかけの鷹 和漢三才圖會菓と雜と自養
ろと捕へ来る者と細掛とるふ

新撰六帖 山さるわけの鷹の手を
てのころわらふる君もあふる鳥家 赤散魚
くらの条 赤切

十月 赤豆の粥 赤切
記共工氏不才の子なり冬至の日と以て死して疫鬼
とある赤小豆と畏る故ハ此日赤豆粥と作り食し
てこれ

あかりのい 増山の井 本邦も冬至ふ
とて赤小豆の飯と用るるもなり 様葉 相嘗祭
膳まらり外ふりれあ赤拍 良品

上仰 先代旧事紀 今日天皇正禋殿小幸し三公
九卿と徴相嘗の詔と宣下りる三輪住吉熊野熱
田廣田射駒降飯大和津島の大社と祭る其國の
國司小命じて其國の宮倉の初米と以て花と供其
社司神巫ホ官幣と賜ひて禘礼と行ふ 阿知女

公事根元 この祭近きとる絶て
かの部神素
の条より出ツ

十一月 淺草観音追儺

除夜よ 江戸金龜山淺草寺小あり今宵赤誦堂
り七日 中ふ充つ初更のころ鬼形の者一人堂外小
出又一人方相氏の假面とる者これと追こ堂
と巡ふ後除夜の札三千枚と撒して諸人小與ふ本
冬

詣の人各異ひ格と持 **さ** 十月 残菊

詣りて自家の門ふ貼す **さ** 十月 残菊 公事根元 昔菊花の宴九月九日やぐ又 残菊の宴十月五日ふ行どつりふれも

群臣詩と作つて酒と **山茶花** 和漢三才圖會 其樹葉花實

海石欄の同くくし其葉茶の葉 **蕪二文物**

の如し其実田く長し花冬と盛ん **さ** はひこめ 霜の異名あり秘藏抄さはひこめ かくらが宿のませのころふらら

蓬はら **牙** 字彙 冷 寒き夜 ○有明 清甚也 寒き朝 あり

てん **さ** し 卑の小さき者より卑小似て鶴 あり小く鶴とも朝鮮あり

寒れ去来 **十月里神樂** 連奇秘抄 内裏の外と表 里神樂より私の心居所

侍川と山神樂よりふとあり **十一月 寂勝寺**

灌頂 五日 名勝志 土人云寂勝寺の旧跡八岡崎村 西二条通の一町ぐり西あり櫻

田とつ六勝寺の其一也 **以呂波字類抄** 保元三年上

月十五日寂勝寺めて灌頂と始めて行り大僧正覺

明と以て大阿闍梨とて此寺の櫻と詠ま奇 あま

わんてういありの春をととむと白川の花の下陰壁

齋宮の繪馬 晦日 齋宮ハ伊勢國多氣郡 あり今齋宮村あり多氣の

都或ハ竹の都と名 **増山の井** 齋宮の樹下道の傍

小き祠あり晦日の夜里人繪馬とて行事あり行疫

神とあひし とや天王寺の道公法師熊野 より帰るさふこの樹下小宮し繪馬の神あり

行疫神の馬に乗めく音とてこの繪馬の神前 とて法華經讀誦の切力 ありてこの神補陀落山小生に觀音の眷屬とあ

と掛ふとの毛色とて来年 **歳藏市** 江戸日本 橋の東三

の秋の農業と占ふと **冬** さき

町でくろ四日市ふあり三河万歳江戸ふ来つて殿士の
才藏と傭ふより毎年四日市せこの傭ごころを
傭ごころふふまを **逆叢** の部周見 **き** **兼三**
才藏市ふふまを

冬物銀竹 羅山子曰銀竹ハ雨といふあり李白
詩云白雪映寒山森々似銀竹○

垂氷雨切干製 切干ハ冬月葉蔵と切ると糸
の如くもろきと織羅新云

延ふ横け晒乾を故切干 **金海鼠** 鼠の部主海
と名く尾州多く製衣之

北窓心塞 漢志大陸ハ北方北ハ
伏ニ陽気下ニ伏を **十一月添**

古口線 荆楚歲時記 晋魏の間宮中紅線と以て
日影と量る冬至の後長きと一線と添

文昌雜錄 唐の宮中女切と以て日の長短と
換ふ冬至の後常の日ハ比と比線の切と増 **十月**

衣配 年のそしりの料ふおとと人々ふ衣と贈り
と入宇津保物語源氏玉葛の巻示やと

十月維摩大會 十日より 南都真福
十六日迄 寺ふおいて

この会を開く 元亨秋書 齊明天皇三年十月内臣
鎌子山階寺と建 維摩會と修を陶原の家ふ於く

山階精舎と創り維摩會
と設く是維摩會の始あり **兼三冬物雪** 天
地積陰温ふるふるハ雨くハ寒ふるふるハ雪ふるふる

春秋元命包 陰陽疑て雪ふるふるハ雪ハ五穀の精ふる
○六ツの花玉の塵 余雪雪吹雪吹倒てれ雪ふる

雪がふるふる雪ふるふるハ雪粉雪峰ハ米雪以上類字
の部ハ **雪花** 韓詩外傳 九草木の花ふるふるハ五出

注 雪の花独り六出 陸願文 正徳末年印
本ハ考す

風やゆる夜ゆるふ雪の花菊伍 因ハ云此雪の花の
句ハ五月雨やりの夜ゆるふるハ松の月とふるハ雪中菴参

太らるる **雪消し** 紀事 十月多く雪ふるふる貴
ハ先吟あり 賤粉餅並ニ菓実木の物と

ハ先吟あり **雪消し** 賤粉餅並ニ菓実木の物と

ハ先吟あり **雪消し** 賤粉餅並ニ菓実木の物と

ハ先吟あり **雪消し** 賤粉餅並ニ菓実木の物と

互小贈る是と雪満しとる言さういふ雪まゆめ

とんと食へる寒気と忘るるの語さういふ

御傘もまき冬あり時雨ふ風のそひるるさういふ

雪のこひるるさういふ雪まゆめとるいふ雪吹ふ物あり

雪空 雪の降 雪気 雪催し 雪け 雪とと

新撰朗詠 菩提木落 紅無跡 雪確

月晴 雪有 声 藤原明衡 ○ 雪の積

小裏表あり雪の声 嵐雪 ○ 青藍云月令 博物志云

静小窓あり雪の音あり云 愚按 雪まゆめとる

月晴とるる小合も樹木或竹まゆめ積 雪まゆめ

北地あり雪まゆめとるるさういふ雪まゆめとる

小應まゆめとるるさういふ雪まゆめとる

竿 又深雪のうら物のあるさういふ立切るる雪草と

りふ 雪やけ 寒気指と置きとるる 雪礫

雪打 小石の如く雪と相つらふ 雪九け

続虚栗 君火のけしとる物 雪佛 雪布袋

雪達磨 新拾遺詞 雪あて 丈六のむけとる

枯尾化 此下ふくくねむるる雪佛 嵐雪

雪布袋 雪達磨とる雪中の戯れ作とる 雪獅子

張文潜 戯小雪獅子 雪女 深山雪中 掃ふ女の良と

と作る文あり 雪と 現まこれと雪女の良と

の精ふ 雪の山 雪山と音ありとる 雪の肌

女の肌の白まゆめとる 雪履 注よ 雪垣 比國大雪

ふとまゆめとるさういふ 十月 初より用意して人家軒まゆめとる

さ九太材と立掛て横と結び篋と編と付て垣まゆめ

深雪の内其陝と道と隣家

へ通まゆめとるさういふとる雪垣とる

冬 十月 虎耳

十二月行 雪の下より名ふ付て冬、季とせらる

年 炭俵行年よ京へ **の** 十二月 和布坊

の神事 晦日長門國文字關の北あり、集人の社

豊玉姫不音合、河度目、磯良あり、祠の後、一巨石あり、石の因て祠を、前ふ、謁殿、舞殿、神厨あり、謁殿の下に、石の鳥居と建、鳥居と出、石礎ありて海、底、小、連、を、虚、潮、日、と、り、と、の、窮、む、る、所、と、も、十二月、晦、日、に、夜、四、更、ふ、祝、衣、冠、帶、劍、と、鎌、と、携、へ、炬、と、拳、石、礎、と、下、に、海、ふ、入、和、布、坊、と、帰、る、終、夜、祝、詞、あり、元、旦、ふ、和、布、を、

神前小奠し既りてん **み** 兼三友物雲 撒し、國王ふ献りたり、

廣雅 雲、雨、雪、雜、り、下、る、あり、〇、こ、れ、み、と、る、と、も、

深川集 附、御、簾、ふ、こ、も、下、加、茂、の、社、家、

みどき酒 霰酒ふ 三の花 霜の異名あり、博、物、荃、水、の、花、の、轉、

音とも又雪と六ツの花より **水** 水漬 鼻中ふ水、と、出、せ、と、孰、

と名霜と三ツの花とも **水** 水鳥 時珍曰、水鳥、ハ、夜、咳、水、禽、

寢鳥 水鳥とのあり、掘川百首水より、王藻の床、

水鳥 ハ、昼、も、よく、寢、る、物、 鷓鴣 桃、虫、巧、雀、女、匠、

故小夜分ふあらむ **鷓鴣** 桃、虫、巧、雀、女、匠、

桃雀 ホ、の、諸、名、あり、〇、時、珍、曰、枕、ち、黃、雀、小、似、て、小、し、

灰色 り、て、斑、あり、声、吹、嘘、々、如、し、喙、利、錐、の、こ、と、し、其、

葦 も、虫、と、取、て、窠、と、為、る、大、と、雞、卵、の、如、く、と、て、こ、こ、と、こ、

繫 く、小、麻、髪、と、以、て、し、至、て、精、密、と、お、と、桐、上、ふ、掛、成、ハ、

一房 二、房、故、小、莊、子、小、云、林、小、巢、く、て、一、枝、不、過、七、貞、

享式 古、抄、ふ、秋、み、て、渡、り、鳥、の、部、ふ、入、と、も、山、雀、

日雀 の、類、ふ、わ、ら、て、存、鶉、の、物、ふ、連、立、む、民、家、の、軒、

小馴 て、馬、防、と、傳、ひ、水、棚、ふ、の、と、い、声、の、清、こ、い、琴、更、

小寒 し、春、帰、る、女、も、と、え、ね、

木兎 和、漢、三、才、面、会、

木兎 日本、紀、用、

冬 み

まると十日十夜あるは他方諸佛の国土小善を多くと
千歳の勝なり。故小十夜といふ。洛東興善山真正
極樂寺真如堂天と以て始まると本尊慈覺大師の作
ふ此像冥驗ふらり。別時念佛と始む。これと十夜と
の蓋伊勢守貞國まろつら 十七日○洛陽惠日山
東福寺開山忌

也。其事今日方丈小什物と飾り午後聖一の像を腰
輿に乗て寺僧前後ふ道從ひ。經堂の須弥壇に坐置
を此開山忌昨今と年中遊覽の終るを故小舟嘗納
といふ。聖一弘安三年十月十七日寂も偈。日利生方

便七十九年。欲知瑞的佛祖等
傳云の真筆と開山堂ノ掲
晝夜のわらちあり。陰晴と論せむ。時々急雨あり。これ
と時雨といふ。初時雨。村時雨。淵の時雨。袖の時雨。川
音の時雨。松風の時雨。各頭字の部みわらして注を○

液雨時珍曰立冬後十日と入液といふ。小雪小至て出
夜といふ。又葉雨といふ。百虫を食むと飲くとも伏蟄し
て来春小至云。和俗液雨と云ふ。と訓も時節と取

合せて
兼三友物霜見草
冬菊の異名
蔵玉の代へし

松の木うけの霜見草うら
夕時雨
小夜時雨

霜
今朝の霜
朝霜
霜夜
霜日和
霜解

天戴礼
霜ハ陰陽の気あり。陰気勝るととを
變て霜ともある。秋名小霜ハ表より其氣感

三ツの花ボの異名あり各頭字の部み注す。
花
筆談
天至中青州盛冬ふらと濃霜
霜の
と屋瓦ふわく。皆百花の状ちとある。

劍
春秋感精符
霜ハ殺伐之表
新撰明詠霜詩
云寒、鞭駟未難駐、曉又裁未錦不完

集落葉衣らの霜の劍や。実次○霜と劍やと
こいひ又劍と霜ふといつてものふあり。本朝文粹霜行又

去雄劍在腰技
霜柱
新撰六帖谷うら。若屋らとて
則秋霜三尺順

霜山朋
同上
山里の門田のあせの霜

光夜
霜山朋
らづまおち穂らうら。道ら

霜

霜

霜

霜

霜

霜

霜

霜

霜

霜

霜

つ 霜しも **同上** 山やまの霜しも **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

内大臣 光俊ひここ集 霜しもの鐘かね 夕薄く日ハ曇り霜の鐘

○音ね藍あま云い上かみのの霜しものの意いととりり 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

山やま九こ鐘かねのの霜しも 山九鐘の霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

金かね気き應おうるる **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

遠とほ近ぢか集しゆ 遠近集 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

宋そう邦ほう集しゆ 宋邦集 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

霜しものの鐘かね 霜の鐘 **霜** 霜の鐘 **霜の鐘** 霜の鐘

實競ひてえふ倣人國老於死來の太祖嘗て冬月

獸炭と徴つ左右殿と曰今日苦寒上の日天下の民

寒き者衆し朕何助炭冬春地炉と愛ふ

と燗温渝ふらんや助炭とて炭炭とらん手

燗 火炒の小さき者 生薑酒 本朝食鑑生薑酒

治 十一月襪 くの部獻後襪と 生薑堀 凍腹及ふ令積と

滑登目雜談本草ホの説よらん秋月根と掘べ

きふも京都ふ多く冬月ふはるのりて葉は本物

ふ十一月とも種東國 新干蕪 新干大根

ふハ秋分前後掘之 九干蕪ハ冬至以前根と取て

乾りをもろふ干蕪と名づく春月煮食極て甘美

十二月をばもと 能諸歲時記この月といふ

年極の略とつとを連きふてりふハつとを打まか

暗推あり奥儀抄云この月僧とむく佛名と行公或ハ

經とよませ東西小駈をとり故ふ師走正月とあやま

なりとは字ふつまで説設くるの誤と貝原篤信云

後国小四極山あり四波津山と称をその名も訓も證や

まづいとの説其要を得るふ似たりとるれとも四敷の

四ふあひてどりのとを暮せるふれハ四波津と書可也

真名ふハ年極 神今食 十日六月十一月一年の兩度

とくを極し 正月事始 吉日 紀事十三日正月万支の

とふ二月用 勝の餅 この部五奈天神 鹽川

所の場多買之 鮭、塩鯉 このとくハ歳暮 齒朶川

て入季の部不出せり作例ハハハ 除歲、除夜

況活筆談以新易書曰除 名 除夜

如新舊歲之文謂之歲除 名 除夜

名 除夜

名 除夜

名 除夜

名 除夜

十月 氷魚と賜 公事根元 更衣の節会 終

の花 五出細き白花をひらく 天和本草 桐骨本草 時珍説ひらき小あつた木皮と煎し鳥もち

枇杷の花 夏のひの部 枇杷 和漢三才 有之 実の余小注を 鶴 雨金天

雀の如し頭黒く白き尾あり俗霜降うへ領 正黒 背翻反赤あつく黒き尾あり翅の上白き羽黒き羽あり

又昔 鶴あり負享式 古抄あり渡鳥の部入るる其 名ものまも朝霜の気色といひ秋は小鳥のま

三冬物 氷魚 名産あり他州あり伊勢江戸の江 名産あり他州あり伊勢江戸の江

宇治川は網代と打てること取堅田ありハ檀網にて

多く 氷魚の使 延喜式 山城国近江國氷魚網 取れり 代一處其氷魚九月より十月

水面鏡 藻塩草 紐鏡と 書氷のつきの

火鉢 火桶 桐火桶 枕草紙 人の家小

干葉釣 や菜とあつた 部の部

十二月 部の部

日吉祭 中の申の日の一年小兩度あり夏の平

野祭 のまらり 上申日一年小兩度あり 夏の部

祭 中申 公事根元 建曆三年十月十八日より始

暦寺の衆徒長樂寺より官兵の馬ふ多く誅せ

らふが等の事わさるとのころ御願ありとて好

冬 ひと

日蔭の糸 日蔭の蔓 この部豊明の 日の

使 この部御祭の 十二月 終賣 此の部節分の

十月 子夏餅 公事根元 大さこの義 孟夏の旬ふむら

紅葉散 貞享式 山古式とむらこく教と 兼

三冬物もち雪 青藍云もち雪との詞増 山の井とすめ後小標る諸

便紙集 寛文四年印 本梅盛撰 小米雪粉雪餅雪と男文字とをそ

書とる 證とる 毛吹草 餅雪のうきとある木の 葉とる 道二天子集 餅雪ふ歯とつづる木履の糸

重頼 餅雪のうき 山古式とむらこく教と 兼

十月 杜木祭 十四日一年 小西

度あり夏のもの の部とる 十二月 孟宗竹 寒竹の子大

本草 品寒竹冬筍と生む又孟宗竹ともいふ色黒く 細し○晋の孟宗至孝よく後母筍と好む宗よく

冬月とれと求めむ宗竹林ふ入て 慟哭笑とる為ふ 生む以て母ふ供むること得ふとつづる古事とありて

孟宗竹とつづる○鳳尾竹 餅卷 餅米洗 紀事

と孟宗竹ともいふとつづる 餅卷 餅米洗 紀事

尾傭夫孟夜とる木槌と肩より街衢を巡り高きう 餅持とと呼佳俗米餅と春と加都とつづる貧民これ

と春ひ以て餅と春ひ日間ハ暇をむり又 餅の札

吾山遺稿 江戸ふて非人とも門々ふ立て餅卷の祝いとて 餅とる

紙とる判とて張やとる 餅卷 餅花

弱法師我門の餅の札 其角

兒女小丸の餅と枯枝小賜て
こんと読むことと餅花の
十月新言文校

世目神社便覧「官者殿」京極四条小鎮座世奉ての
神の誓支記諸赦免の社との入「紀事」俗傳ふ此神の偽
盟の罰「免」せしむる故ふ商賣此社に請て欺き
賣の罰「被」ふり故ふ十月廿日講談諸事と誓言文校
よへ此社何神ある詳ふ世土佐坊正後千二後

義經の前より偽り追討使らるる王と誓言因り罰
果ふ殺る故ふ他人の
偽誓の罰と救ふらん
青女 高秀曰青女八月天
の玉女霜雪と玉の

兼三冬物列平繩 この部鷹 西施乳 河

の異名こふ 豆打 終 十二月節分 頭をも 鱈とい 鬼外

福の内 紀事九節分ハ立春の前日こまり年内節分
羊葱 わらじきハ禁裡煮豆と殿中み撒せらるる
疫思と逐ふ春ふあも亦然り今夜大豆と撒と拍と
い人同夜家々の門戸み鱈の頭首み狗骨の條と押

ひ傳へいふこの二物疫鬼の畏る所あり一家の内ふ
事と執る者と羊男とく高きふ鬼ハ外福の内呼
て疫と獲ひ福とりとむ下界のありの頭をも 土
佐日記九重の門の注連繩ふりの頭ひ らききも

あんどりのふととひあふふ 日本書紀云口女即鱈
魚 下部の説あり鱈ありとく道遠軒ハ名吉伊
勢鯉とりふ魚云く〇いり 埃囊抄 鱈魚
云鬼ありて人と食む鱈と交申とあつて家々の門
小きとぐし然るときい鬼人ととく 毘沙門の

御示現云く夫木世の中いふふもふねともひらきこの
色ふ出てもととととと 鳥家〇ひらき
よしの頭ととととと後ふ鱈うへ物あらん 節

季季候 紀事 節季候今日 二 より乞人笠の上ふ
葉菜の葉と擲し赤き布と以て面を覆
ひふらふ兩眼を出し二人或ハ四人相とり人家人入
り庭上ふ躍と催し米錢と乞ふ身と弟季候と又
弟季と告る歳暮の詞あり二十七日より至て止む〇

今江戸まで節季候とく者の姿ハ編笠と以て面を覆
冬 せ

ひ室ひむろ冬ふゆと画えきくま紙かみの前垂まへたるとくけ破やぶり竹たけ
と両手りょうて小持こもちてくまくまとくまくまとくまくま離はなしあから祝詞いわひことばと唱なく

門かど口くち節せつ季き 倭俗やまと臘月ろうげつと 節料米せつりょうまい 日本にっぽん歲とし
躍はこむ 節せつ季きとあふ 節料米せつりょうまい 時記ときき

二月上旬じゅうじょう或あるハ中旬ちゅうじょう臘月ろうげつの節せつよ入いて多く米こめと春野はるの
て以もて正月しょうげつの用もちとまへし〇曠野くわうや集しゅう 附つ米こめ舂ひやこい志し

くろ其角そのかく 歳暮さいぼ祝いわふ 凡ただ七しち記き 吳蜀ごしやくの風俗ふうぶく
歳とし晚ふ相あ与よ小鯉こゑいふこれと

鯉こゑい歳としとくまくま云いかの國くに
この國くにをわらわむとくまくま

けの部下けのぶか元げん 水仙すいせん花はな 潜確せんかく類書るいしょ 千葉ちやと真まの水仙すいせん
の糸いとふ出で 水仙すいせん花はな とまをるまをるとも單葉たんえつの者もの

魚肉いさくとくまくま移うつまんかまめ杉板しかんの上のうへ 炭すす
あて焼やき箱はこをて焼やきあつとも

獸けつ炭たん賣う炭たん鐵てつ各頭かくとう 炭斗たんとう 茶經ちやけい 烏府くわふ是こゝ炭斗たんとう
字あの部ぶふらとて注しゆス

異ことなりあり好このむ 炭頭たんとう 王海集わいけいしゅう 顯室けんしつ ちよりしい
とくまくまふまふまとくまくま

宗方そうほうの青蓋せいがい云い伊豫いよの産う某なる云い我國わがくにわてハ炭すすののまま
焼やき尽つく煙えんると炭すすがしらとくまくまと云いく宗方そうほうの句ことば此こゝ意いふ

合あつ羊やう浪草らうそうふ一俵いちたうの内うちをて大おほなる炭すすとくまくま
とくまくまの理ことわりり聞きくるととてハ風情ふうせいうまうま

炭すすと焼やき竈くわとくまくま御今ごいま山類さんるいあり 炭すす焼やき 御今ごいま
炭すす竈くわふ手負ておみの猪いのの倒たふれり凡ただ兆ちやう

あらしと 炭賣すすうり 冬ふゆの日ひ炭賣すすうりのふゆ
人倫にんりんと 炭賣すすうり 妻つまとと黒くろくらの重おもか

かの部ぶ榊せきのの部ぶ注しゆス 雀すずめ 十二月じふにがつ 煤拂すすはらひ 長明ちやうめい
冬ふゆの注しゆス

物語ものがたり此事こゝ事こと陽成やうせい院いんの御時ごときふ始はじめふ 或ある説とふ煤すす掃はらふ
三日さんじつと用もちふと此こゝ日ひ鬼おに宿やどふあつり吉日きちじつふれハ煤すすと粉こな

冬ふゆ 冬ふゆ 冬ふゆ 冬ふゆ

冬ふゆ 冬ふゆ 冬ふゆ 冬ふゆ



